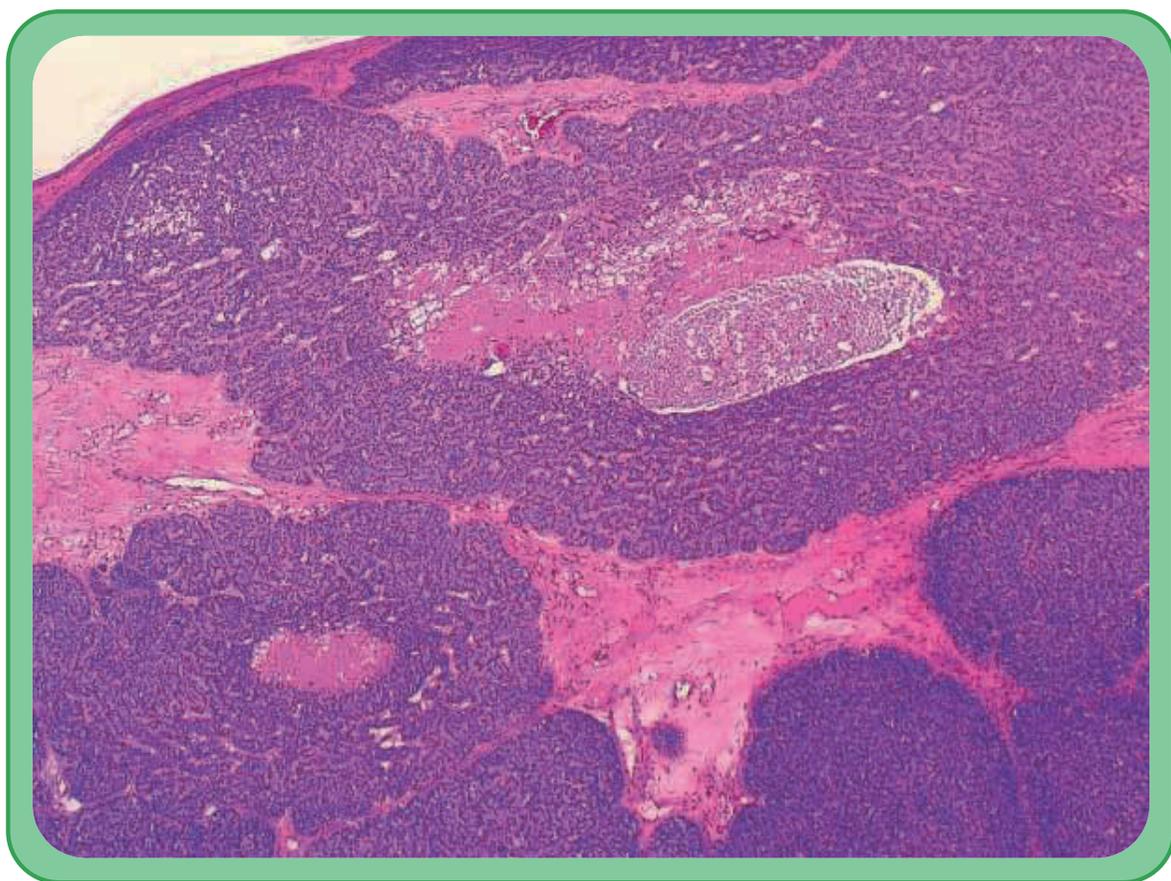


第21号

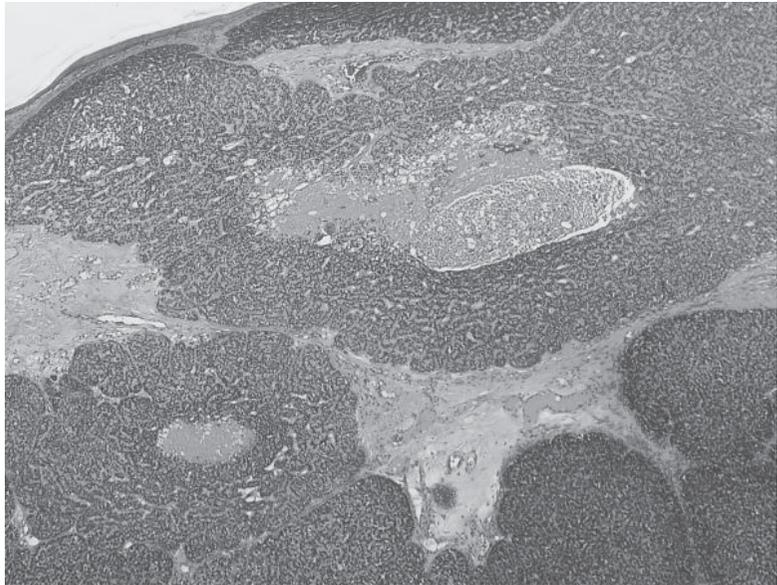
さくらしま

2007



鹿児島大学大学院
聴覚頭頸部疾患学講座
(旧耳鼻咽喉科学教室)
同門会誌

〔表紙写真の説明〕



Basaloid Squamous Cell Carcinoma (BSCC/類基底細胞扁平上皮癌)の病理組織像 (83歳男性 Hematoxylin and Eosin 染色)

BSCCは扁平上皮癌の一亜型として1986年に提唱され、1991年にWHOの組織型分類に掲載された疾患である。病理組織像では腫瘍表面のsquamous cell component (扁平上皮細胞層)と、腫瘍内部のbasaloid component (類基底細胞層)との二形態を併せ持ち、上皮内扁平上皮癌を伴い、腫瘍中心の凝固壊死 (comedonecrosis)を認めるという特徴がある。表紙写真の中央と左下方に認めるのが凝固壊死 (comedonecrosis)である。(牧瀬 高穂)

目

次

巻頭言	1
会長の挨拶	3
Ⅰ. 同門会員通信	4
Ⅱ. 教室来訪者	11
Ⅲ. 教室行事	
1. 共催の講演会	12
2. 第36回日本耳鼻咽喉科感染症研究会・ 第30回日本医用エアロゾル研究会	15
3. 第9回 耳鼻咽喉科桜島フォーラム	19
4. 第7回 耳鼻咽喉科 鼻の日 市民講座	20
5. 耳の日 市民公開講座「知っておきたい耳の病気」	20
6. 2006年水曜セミナー	22
7. 第13回 アレルギー週間	24
Ⅳ. 同門会報告	25
Ⅴ. 地域医療報告	
1. 巡回診療（県医務課）	28
2. 身体障害者巡回診療	28
3. 学校保健（統計報告）	28
Ⅵ. 特殊外来通信	
1. アレルギー外来	31
2. 副鼻腔炎外来	31
3. 頭頸部腫瘍外来	32
4. 難聴・耳鳴り外来	33
Ⅶ. 病理集計	34
Ⅷ. 各省庁諸研究	35
Ⅸ. 業 績	
1. 原 著	36
2. 著 書	37
3. 総 説	37
4. その他	39
5. 国内学会・研究会発表	40
6. 国際学会発表	50
7. 学位論文要旨	51
X. 医局通信	
1. 医局人事	56

2. 学会報告

- ① 第18回日本喉頭科学会総会・学術講演会……………57
- ② 第18回アレルギー学会春季臨床大会……………57
- ③ 第68回耳鼻咽喉科臨床学会……………58
- ④ 第30回日本頭頸部癌学会, 第27回手術手技研究会 ……58
- ⑤ 第1回小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会…59
- ⑥ 第21回九州連合地方部会学術講演会……………59
- ⑦ 第19回日本口腔・咽頭科学会総会……………60
- ⑧ 第45回日本鼻科学会総会……………60
- ⑨ 第16回日本耳科学会総会・学術講演会……………61
- ⑩ 第58回日本気管食道科学会総会に参加して…………61
- ⑪ 第56回日本アレルギー学会秋季学術大会…………62
- ⑫ 第36回日本免疫学会総会に参加して……………62
- ⑬ 第17回日本頭頸部外科学会……………63
- ⑭ 第38回睡眠呼吸障害研究会……………63
- ⑮ 第19回気道病態シンポジウム……………64
- ⑯ 第19回日本喉頭科学会総会・学術講演会…………65
- ⑰ 第1回 Airway Mucosal Immunology Study-Group (AMIS) Meeting ……65
- ⑱ Joint meeting of Otorhinolaryngology-Head and Neck Surgery ……67
- ⑲ ERS and ISIAN 2006 (Tampere, Finland) ……68
- ⑳ 2006 Joint Meeting of Eight Departments of Otolaryngology ……69
- ㉑ The 11th Asian Research Symposium in Rhinology ……69

3. 関連病院便り

- ① 国立病院機構 鹿児島医療センター……………71
- ② 県立大島病院便り……………71
- ③ 鹿屋医療センター便り……………72
- ④ 鹿児島市立病院便り……………73
- ⑤ 藤元早鈴病院便り……………73
- ⑥ 済生会川内病院便り……………74
- ⑦ 鹿児島生協病院たより 第二報……………76
- ⑧ 天辰病院便り……………77

XI. 関連病院……………79

XII. 海外同門会名簿……………83

XIII. 自治医大研修生……………87

同門会会則……………89

編集後記……………91

巻 頭 言

黒 野 祐 一

早いもので、今年は私が鹿児島大学に赴任して10年目になります。そこで、今年は一つの節目として、この10年間でじっくりと振り返り、これからの新たな方向性を見出す年にしたいと考えております。しかし、まずは、これまでこの非力な私の指導によく従い大学における診療、教育、研究の発展に協力していただいた教室のスタッフ、そして同門会ならびに地方部会の先生の物心両面にわたるご支援に心より感謝申し上げます。皆様のおかげで、昨年は第36回日本耳鼻咽喉科感染症研究会ならびに第30回日本医用エアロゾル研究会を開催させていただき、成功裏に終えることが出来ました。さらに来年は、第3回日本小児耳鼻咽喉科学会、そして第21回日本口腔・咽頭科学会を主催させていただく予定です。こうした学会を鹿児島で開催させていただけるのは、これまでの教室の臨床や研究における実績がこれらの学会で評価されたからであり、そのことを誇りに思うとともに今後の励みにしたいと考えています。しかし、これからの教室運営を考えると、マンパワーの不足が深刻な問題になってきました。

卒後臨床研修の必須化によって、地方大学における研修医が激減していることは数々のメディアが報じているとおりであり、鹿児島大学病院でも、制度が発足した当初90名いた研修医が今年は30名を割ってしまいました。これに伴って後期研修医も年々少なくなり、とくに全国的にも入局者が減少傾向にある私ども耳鼻咽喉科学教室での今後新たな研修医の確保は困難を極めていくことが予想されます。現在研修医が集中している都市部やいくつかの診療科はいずれ飽和状態となり、そうすれば地方大学や耳鼻咽喉科への入局希望者が増えるだろうという楽観的な考え方もありますが、その確証はありません。たとえそういう日が来るとしても、それまで地方大学の教室や関連施設の運営が耐え得るでしょうか。さらに、法人化によって独立採算制が求められ、かつてのような魅力が薄れつつある大学病院での業務に、このマンパワー不足が追い討ちをかけて、若い医師が疲労困憊し大学を去っていくことが懸念され、将来の地方における高度医療を担うべき人材の育成が危ぶまれます。これが、今まさに我々が直面している問題であり、早急な対策を講じなければなりません。

そのひとつの方策として、今年からいくつかの関連施設に学生教育への協力や卒後臨床研修医への啓蒙をお願いし、耳鼻咽喉科学の面白さを多方面から伝えていただくことを計画しています。大学の実習ではどうしても頭頸部外科に偏りがちで、そのインパクトが強すぎる嫌いがあると思われるからです。さらに、地方部会や同門会主催の講演会へ学生や研修医の参加をより広く呼びかけていきますので、出席される先生には、是非



彼らへ積極的に話しかけ、耳鼻咽喉科学の扉へと誘っていただきたいと願っております。また同時に、教室や関連施設で診療や研究に頑張っている若いスタッフへも励ましの言葉をかけていただければ幸いです。

今年と同門会総会で本会の役員構成を変えることをお認めいただき、山本誠先生が新たな同門会会長に就任されました。主任教授が会長であると、会の運営において意見しがい事が多々あったでしょうが、これからは同門会と教室が互いに忌憚のない意見を交わすことができるものと思われまます。これが教室のさらなる発展をもたらし、将来の耳鼻咽喉科・頭頸部外科学を担う優秀な人材の育成へと連なるものと期待しています。

会長の挨拶

山 本 誠

今年の1月13日の同門会総会で、会長に指名されて3ヶ月しかたっていないのに、会長挨拶と言われて戸惑っています。鹿大耳鼻咽喉科同門会は、最初、久保先生の退官に伴い、急遽作られた会でした。その後は機能する事なく、またしても大山先生の退官の時に再編され、黒野教授を会長として、現在の同門会の体制が整えられました。この度、教室主催者が同門会の会長を兼務するのは、不都合が多いので、同門会員から会長をとの黒野教授の強い意向で、同門会の中から会長を選ぶことになりました。先輩の諸先生方が多数いらっしゃるのに、私が指名されたのは、一重に、忘年会、サマーキャンプ、ゴルフ大会等の教室の諸行事に、より多く参加し、教室を離れて20年にもなるのに、後輩の同門会員や教室の先生方にも顔を覚えてもらっている事や、久保教室と大山教室に在籍し、先輩の先生方の知己を得ているからと思っています。以上の事情から同門会長になったからには、同門会と教室のパイプ役、潤滑油となるべく精一杯頑張りたいと思いますので、御協力をお願い申し上げます。

本稿を書くに当って、“さくらじま”の創刊号を再読しました。創刊は昭和62年3月24日で、大山教室の10年目に当たり、教室が充実してきた時で、教室員は総勢40名となっています。私が、久保教室に入った時の教室員は12名で、外来係り、病棟係りもなく、皆で、外来、病棟、急患をこなしていました。最近の教室も、相次ぐ開業や新研修医制度の弊害で、教室員も減少し、さらに我々の頃と比べて、研究や個人情報重視、アルバイトの制限なども加わり、教室運営はたいへんだと思われまます。教室員が減少していく事は、将来の鹿児島県の耳鼻咽喉科診療に重大な危機をもたらします。現在は、大学病院、市立病院、鹿児島医療センター、今給黎病院、鹿屋医療センター、県立大島病院でスタッフも充実し、地域内での医療の完結ができていますが、教室員の減少に歯止めがかからなければ、次第に地域内での耳鼻咽喉科医療の完結が困難となる事でしょう。そうならないように、同門会で教室を盛り立てる必要があります、教室の先生方とより深い、より楽しい交流がすすむ事を願っております。今年は、大山先生の喜寿のお祝いや、黒野教室10周年と、大きなイベントが開催される予定であり、この機会に同門会の先生方には、奮って参加していただければ幸いです。

閉院のご挨拶

大野 政 一

体調不良から閉院を考えたのは14年前、3年前そして今回で、職員にも前回体調が持ち直した時、次の三度目には必ず辞めざるをえない時に告げると言っておいた。最近当方の加齢による作業能力の低下と共に患者数の減少はあったが、採算は合い十分に継続可能な状態であった。しかし自分の体調が限界に達していると考えられた事と丁度看護職員の需要が極めて高くなっており、今であれば長年勤務して貰った職員の再雇用がスムーズに往くと思われた事で決意した。“立つ鳥跡を濁さず”を心掛けたいと思い閉院二ヶ月以上前に院内に次のような掲示を3ヶ所に出した。「私こと体調不良に老齢（66歳）が加わり3月24日をもちまして（本院を）閉院することと致しました。

25年間に81,800人以上の方に受診して頂き有難うございました。現在通院中の方には大変ご迷惑をお掛けしますが事情をご賢察戴きご容赦下さいますようお願い申し上げます。継続加療を希望される方には紹介状を書かせて戴きますので申し出て下さるようお願い致します」。

患者さんの反応は慰留、感謝と慰労のありがたい言葉が殆どであったが、中には“近くの先生は80過ぎでまだ働かれている。元気そうに見えるがまだ働けるのではないか”との私より高齢者のお叱りの声もあり苦笑せざるをえなかった。それで閉院の挨拶状をより詳細に書く事とした。黒野教授始め多数の同門の先生方にも差し上げたところ教授から内容に同門の先生方のお名前もあり“さくらじま”に載せてみてはどうかとお電話を戴いた。多くの方に差し上げているので如何なものかとも思ったが若い先生方に往時を知って戴く資料になるかもしれないと思い掲載して頂くこととした。以下その文面である。

陽春の候皆様には益々ご清祥の事とお慶び申し上げます。

私こと本年3月末日をもちまして大野耳鼻咽喉科医院を閉院することと致しました。昭和56年12月開院以来25年余、四半世紀に亘り地域医療に従事して参ったことになりま。省みますと昭和40年鹿児島大学を卒業後、母校付属病院で一年間のインターン（研修）を経て、学生時に担任教官をして頂いた当時学内で厳しいことでトリアス（三主徴、転じて三人の意）の一人と目されて居られた久保隆一教授の教室に入局しました。教室員が少なかったため、入局と同時に文部教官助手となり給与を頂きながら指導を受けられるという、当時としては極めて恵まれた状況下で研修を受けることが出来ました。入局後3年間は単独宿直回数だけでも年に百日前後という多さでしたが、先輩の先生方は

年余に亘り三人で宿日直をされ、24時間以上の休暇は年に数回という状態でしたので当然のことと思って居りました。

厳格な教授のご薫陶を受けられた先輩の諸先生は極めて勤勉で有能且つ心豊かな方々で、指導医として直接手を取って種々教えて戴いた曲田公光講師を始め、江川俊治講師（元鹿児島県耳鼻科医会会長）、松村益美助教授（元鹿児島市立病院副院長）、鹿島直子講師（元鹿児島市立病院副院長）には大変お世話になり医学、医療のみならず医師としてのあり方、生き方も教えて戴きました。また同時に同輩後輩の諸先生と切磋琢磨しながら関連の鹿児島鉄道病院（1年）、県立宮崎病院（3ヶ月）、県立大島病院（3ヶ月）への出向を含む10年余の医局生活で修練の日々を過ごす事ができました。更に看護部耳鼻咽喉科婦長有村ヨシ子氏（元歯学部付属病院総婦長）に看護力が医師、設備と共に医療成否の決定的な要因になることを折にふれて教えて戴き、その後の医療活動の指針となりました。

その間昭和45年に第二病理学教室遠城寺宗知教授（元九州大学医学部第二病理学教室教授）のご好意により勤務時間外ではありましたが、同教室への出入りを許可して頂き研究標本の切り出しや観察方法に関し丁寧にご教導戴きました。教授はその後間もなく母校九州大学の教授としてお帰りになれましたが、技官山下勝江氏（鹿児島私立病院主査）に種々の組織から構成されているため、作成が極めて困難を伴う喉頭の大切片標本を継続して作って頂くことが出来ました。更に当時同級生の上片平卓先生が大学院に在学中でしたので種々教えて貰い、臨床雑務のない日は深更まで病理標本を調べることの出来る日々が続きました。その後赴任された徳岡昭治教授（元広島大学医学部病理学教授）には就任直後のご多忙中にもかかわらず論文のご校閲を戴き、その際医学論文の書き方を内容だけでなく、投稿の技術的面に及ぶまで詳細に時間をかけてご教示戴きました。当時第二病理学教室では深夜訪れても誰かが仕事をしておられ両教授を始め教室の先生方の学問に対する厳しさと熱意を垣間見た想いで、当方も身の引き締まる思いが致しました。

昭和51年8月希望して4年前3ヶ月間出向し同門の二宮俊一郎先生のご指導を受けたことのある県立宮崎病院へ再度出向致しました。院長は泉谷武近先生で既に20年以上勤務して激務の生活を続けておられ自己の生活より医療業務を第一義とされておりました。当時医長公舎が院内にあり急患で呼ばれ少し遅れて往くと隣家の院長先生が既にみえておられ恐縮したことを思い出します。また各科に臨床教授のような練達（れんたつ）の先生方が多数おられしかもバリアフリーでいろいろ気軽に教えて戴くことや診療をお願いすることが出来ました。特に病棟が一緒だった整形外科の岩切清文先生や諸先生、麻酔科の本松研一先生（元宮崎医科大学教授、元県立宮崎病院院長）や諸先生、小児科の梶原昌三先生（副院長）や諸先生にはご教示と共に種々助けて戴きました。

始め半年の予定でしたが、上記の各科の連携の良さに加え看護部の医療介助に対する意識と力量の高さに魅せられて、退局し引続き勤務することとしました。

翌年母校教室では久保教授が退官され、11月には大山勝教授が赴任され帰学するようにと勧めて下さいましたが臨床に専念したいという想いが強く勤務を続けることにし、教室からは教授のご配慮により後輩の先生方を1年交代でその後も継続派遣して貰えました。いずれも極めて勤勉で意欲的な“つわもの”達で、二人で週6日の外来診療と25床以上の（最も多い時は40床を越える）入院患者の加療をしておりました。耳鼻咽喉科通常疾患の他に頭頸部悪性腫瘍高度進展例の方も多くしかも開業医では対応出来ない急患症例にも対処しておりました。この間特に留意した事は大学を離れたことで治療学の進歩に遅れないよう可能な限り学会に出席することでした。しかし東京出張中も急患で呼び返され自分の発表を済ませた後キャンセル待ちの便で帰って来たこともありました。公舎が院内にあったことは宿直室に住んでいるような多忙な日々でしたが“忙中自ずから閑あり”でゴルフの好きな先生が来てくれていた年は私もゴルフ場で思いきり地球を叩いて肩を痛めたり、草鞋大の芝生をかつ飛ばしてキャデイさんの仕事を増やしたり、フェアウェイよりラフで時には虫に喰われながら藪の中でボールを叩くことが多く1打当たりでは極めて低料金でゴルフを楽しみました。また農薬の散布されない場所をより走り廻ったためより健康的なゴルフをしたと想っております。一緒に働いた“つわもの”達は現在鹿児島県屈指の大病院の院長や開業医となりそれぞれご活躍ご盛業中です。

52年秋宮崎医科大学付属病院の診療が始まり県都唯一の公立機関という今までの重責を解かれ気分的には極めて楽になりました。また森満保教授（元宮崎医科大学学長）、松元一郎助教授にも種々ご教示戴くことが出来るようになり助かりました。当時も県立宮崎病院はかなりの赤字を抱えており医療機器をなかなか新しく買って貰えませんでした。特に小児気管支異物摘出の際どうしても必要である操作中も酸素や麻酔ガスを吸入させ得る換気型気管支鏡を購入して貰うよう勤務した当初から繰り返し事務をお願いしておりました。

53年度の終わった或る日事務から呼ばれ“今、少額だが使用出来るお金がある。額によっては買って上げられる。”とのことでしたので即座に換気型気管支鏡をお願いしました。その際“今年度は院内で耳鼻科が医師一人あたりの収益が最も良かったので”と付け加えて教えて貰いました。稼ぎのよいのが良い医療ではありませんが、仕事量を事務部に認められたとの想いでその時は素直に嬉しく思いました。

55年病院改築のため住んでいた公舎が取り壊されることになり500m位離れた県の課長公舎に転居することになりました。居住環境は数段良くなりましたが呼び出される度に走らねばならなくなり、急患を手術室まで運ぶ時間的余裕がなく外来で仮死状態にある患者さんを緊急気管切開により救命したこともあり院内の公舎がはるかに機能的に良

かったと想い、今後間に合わないような事例に遭遇する可能性もあるのではないかと考えると一抹の不安を感じました。或る日相方の先生が所要で休んだ日に39度の発熱を来たし事務部に本日は急なことではあるが休診したい旨申し入れました。「今日は遠隔地から来られている方もすでにありますし・・・」と困惑したような返事が電話越しにあり、仕方がないと鎮痛解熱剤を飲みながら頭痛を抱えて外来を始めました。100名近くの外来診察と昼食も摂らず午後からの病棟回診を済ませた後ふっと“この病院にとって医師はデスポーザブルでしかない、一人医長でいる限り限界がある。辞める時期を考えなければならない。”との念いに囚われました。また出身教室からも人手不足で来年度派遣の人選が難航しているとの連絡があり、それに宮崎医科大学も今年より卒業生が出て教室も充実し、関連病院が必要になることから丁度辞める良い時期であるとの思いに達しました。

当時中堅の耳鼻科医師が極めて少なく、大都市部の癌センターを含む複数の公的医療機関からのお誘いも受けておりかなり迷いましたが、盛業中の開業医である親友の勧めと宮崎の紺碧の青空と広い緑の空間とに離れ難いものを感じ当地で開業することとしました。開業に際し産婦人科医であった両親それに妻が“子供も居ないのに敢えて火中の栗を拾うような苦勞をする必要はない。協調性の乏しい私の性格で開業が巧くゆくはずがない。”と大反対をしました。

それに対し私は研究や知ることの喜びのあった大学の医局生活は医学を学ぶ“王道”であったし、患者さんの治療のみに腐心しそれに専念出来た公立病院の勤務は医師としての“ご正道”であったと述べ、曲がりなりにもそれらを経験出来たので残る開業医の生活もしてみたいと力説しました。

特に当時取り沙汰されていたプライマリーケアも体験したい、また頭頸部悪性腫瘍の疑われる患者さんは時宜を失わないように試験切除をすることなく治療出来る機関に転送する開業医になりたいと自分の意志を無理に通して開業準備を始めました。

出身教室は翌年多数の入局者があり56年までは派遣して貰うことが出来、宮崎医大との引継ぎの期間も含め11月まで丁度5年4ヶ月間勤務させて戴きました。昭和56年医療界は既に冬の時代に入ったと言われ銀行が余程の担保物件がないと開業に多額の融資を貸し渋るようになっており、私も多額の返済に自信がなく以前県立病院に一生勤めたいと思い近くを買っておいた住宅地に建築する事にしました。

工事を始めて間もなく当時の県医師会幹部の先生から“あのように一方通行で判り難い場所で耳鼻科開業が成り立つ筈がない、今工事を中止して他の場所に移した方が良い”と言われ不安になりかなり心配しました。気になって仕方がないので県立病院でご教示戴いたことのある近医の秦喜八郎先生（現宮崎県医師会会長）に相談しましたところ“大丈夫”と言って戴き気分的にホッとしました。また開業するにあたり最も意を用い

たのはスタッフ募集で以前より医療の質はナースに負うところが最も大きいと考えておりましたので周囲の方々にもいろいろお願いしました。当時ナース不足の状態でしたが幸い県立病院勤務の三人（うち手術室勤務経験者二人）を含む五人のベテランナースに来て貰う事ができ後々随分助けて貰えることになりました。

56年12月に開院しましたが2週間で一日の来院患者数が100人を超え4ヶ月経過して200人を超えました。一日来院患者数200人は以前超人的な働きをしておられた日田の調賢哉先生（元鹿児島大学助教授）の許にお手伝いに行った時“耳鼻科開業医は日に200人診ないとやってゆけない”と言われていたので目標としていた数でした。当時“県立病院出身者は流行る”と言われておりましたので“例外もある”と言う不名誉なジंकスを創らずに良かったと思って居ります。その間入院加療も始め出来る限り急患患者も診るようにしましたが、一人では手に負えない二次救急の必要な例の対応に困難を感じ一年程で夜間急患は再診以外診ないように致しました。丁度その頃一日来院患者数が300人を超える日があり、診療内容が説明時間もない専門医の医療とは程遠い状態であると感じ、その後来院回数を可能な限り減らすような医療を心掛けるようになりました。耳鼻咽喉科学会も処置回数を減らすことにより来院回数を是正する指導を始めておりましたので私の方針も時宜を得ていたものと思われます。その頃続けているいろいろ怖い思いもしました。手術予定で入院された方がまだ何もしない来院後数時間でくも膜下出血を起こされ意識不明となられ救急車で県立病院に運び当時勤務されていた蜂須賀庄次先生に緊急手術で助けて頂きました。

後で入院に備えここ数日間仕事を片付けるため睡眠時間を削りかなり無理な生活をされていたことが判りました。もし手術中や手術後であったら医療事故や場合によっては医療過誤と見なされたかもしれません。医療事故の中にはこの様な偶発症もかなりの頻度で含まれて居るものと思われそれを一人で対応する開業医の生活が危険に満ちた“一寸先は闇・・・の道”であることを知りました。

何度も来られた再来患者さんがいつもと全く同じ薬剤で同じ様に鼻のネブライザー治療中に急に倒れこまれアナフィラキシー様反応のショック状態となりました。後で当方受診の前、歯科で麻酔薬を使用した治療を受けておられたことや最近疲れ気味であったことが判りました。

当方でも麻酔薬を少量噴霧して治療しましたので麻酔量が過量になったものか薬疹が体調の悪い時より出やすいようにアナフィラキシーやアナフィラキシー様症状の発現も体調により影響されるのではないかと考えました。このような事例は不可抗力とも思われますが患者さんとの会話が少ないことによる情報不足が原因の一つと思われ、その後可及的にナースに問診をして貰うこととしました。

以後カルテに自覚症状はナースに書いて貰い他覚的所見は私が書くこととし恩師の教

えを守りカルテの長期保存を目指し、5年以上経過したカルテは製本して保存することとしました。製本業者（ナカバヤシ KK, 福岡市）によると当時宮崎県内でカルテの製本を頼んでいる診療所は私だけとのことでした。開院以来の82,000件を超えるカルテの厚さは製本したこともあり現在50メートルを超えております。

当時アレルギーの皮内検査とハウスダストの減感作療法をしておりましたが皮内検査だけでも気分の悪さと共に測定不能の血圧低下の状態に陥ったり、痙攣を起こされたりする子供さんが居られ、時には減感作の注射後すぐ（即時型）か暫く時間が経過した後（遅発型）気分不良を訴えられる方もありました。この療法で効果のあった方々も多かったのですが多忙な外来の合間にやるのは無理であると判断し数年で止めることとしました。良い治療法であってもより安全性を考慮すると開業医の立場で施行出来難いことも知りました。

開院後間もなく週一日を手術日としそれに昼休み時間を利用して少数例ではありますが手術療法も行っておりました。自分でも少し無理をしている、疲労気味であると感じていた昭和62年の秋診療中に強い腹痛を感じ急に気分が悪くなりました。残念ながらその時が私の人生のターニングポイントでした。腹痛が続き1ヶ月で10キロ以上の体重減少をきたし、その後嚴重な食事療法が必要となり全く無理の出来ない体となりました。禁酒、嗜好品の制限それに脂肪分の可及的制限が必要でしかもそれに従わないと腹痛が起こるため守らざるを得ない状態となりました。

まさに修行僧のような食事内容で量も控えめにする必要がありました。更に残念なことは仕事も無理をして疲労をすれば腹痛が起こり暗然たる気分のなかでの生活が続くことになりました。已む無く診療以外の事は一切しないこととし6年間お世話になっていた社会保険診療報酬審査会委員も辞任し、各種会合も必要最小限の出席に留め対外的には全くの“鳴かず飛ばず”の状態でここ20年間過ごして参りました。その中でも発病初期に的確な診断をして頂き種々ご教示下さった志多孝彦先生（県内科医会会長）のお蔭で敢えて増築をし、少しでも前へ進むことが出来ました。

この間宮崎大学医学部耳鼻咽喉科小宗静男教授（現九州大学医学部教授）、東野哲也教授始め医局の諸先生、県立宮崎病院耳鼻咽喉科の諸先生に大変お世話になり有難うございました。

超零細とはいえ多い時は15人の有能な職員に手伝って貰い、25年間多数の方々に受診して頂き腹痛を抱えながらも精いっぱい走り、遅れながらもフルマラソンを完走出来たのではないかと居ります。特に長期に亘り勤務して貰った勤勉な職員（20年以上勤務のナース6人、17年勤務のナース1人）には随分助けて貰い感謝しております。病を得ても日本医師会の傘の中に居るということは精神的に安んじて仕事をする事が出来ました。歴代の宮崎県医師会、宮崎市郡医師会の役員の諸先生、他会員の方々に感謝

致します。また鹿児島大学鶴陵会会員の前田守孝先生（元県立宮崎病院副院長）、畏友浜田恵亮先生（元県立宮崎病院副院長）始め諸先生には何かにつけて助けて頂き有難うございました。更に故安達哲哉先生始め宮崎県耳鼻科医会会員の諸先生には大変お世話になりました。

医師になって40年以上只管（ひたすら）医療に従事した積りですが終わってしまうと一炊の夢という感じも致します。病を得るまでは時に向かって駆けていたのが病を得た後は時が自分を通り過ぎていった感じで“仕事に完全燃焼”とはいきませんでした。閉院に際し数多くの“辞めないで欲しい。涙が出る。”等の患者さんの声に些かなりともお役に立っていたのだと目頭と胸が熱くなり開業医として最後に何にも変え難い貴重な報酬を頂いた想いです。

またここまで辿り着くことが出来ましたことはひとえに皆様方のご厚情とご支援のお蔭であると深く感謝申し上げます。

今後の残された時間は自ら鞭打って酷使した病身を厭いながら長年積読状態にある多数の書籍に目をとおし、医師になってから忘れていた思索の時間を楽しみたいと思っております。今後ともよろしく願い申し上げます。

末筆ながら皆様のご健勝とご御多幸を祈念申し上げます。

平成19年4月

大野 政一

Ⅱ. 教室来訪者

(平成18年4月～平成19年3月)

7月 熊本大学大学院医学部耳鼻咽喉科教授 湯本英二

7月 九州大学大学院医学部耳鼻咽喉科教授 小宗静男

7月 島根大学医学部耳鼻咽喉科教授 川内秀之

1. 共催の講演会

1. 第39回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会（平成18年4月27日）

特別講演：「嗅覚障害の治療について」

平川 勝洋 先生

（広島大学大学院耳鼻咽喉科学・頭頸部外科学 教授）

一般演題：「スティック型嗅覚検査の紹介」

松根 彰志 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

「アレルギー性鼻炎に対するプラズマカスド併用療法の検討」

内菌 明裕 先生（せんだい耳鼻咽喉科 院長）

2. 第40回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会（平成18年5月25日）

特別講演：「鼻副鼻腔炎の病態と治療」－最近の話題－

増山 敬祐 先生（山梨大学大学院医学工学総合研究部

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 教授）

一般演題：「鼻腔腫瘍摘出術における術前顎動脈塞栓術の

有用性とその適応について」

川島 雅樹 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

「確定診断に難渋した上咽頭 NKT リンパ腫の1例について」

吉福 孝介 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

3. 第30回日耳鼻鹿児島県地方部会総会ならびに学術集会（平成18年6月18日）

特別講演：「日常診療におけるめまいの診断と治療」

古屋 信彦 先生

（群馬大学大学院医学系研究科聴平衡覚外科学 教授）

一般演題：「喉頭癌病気分類における PET の有用性」

川島 雅樹 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

「鼻出血患者の背景因子に関する考察」

－抗血小板剤との関連性について－

原田 みずえ 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

「副咽頭間隙腫瘍の術前診断における問題、」

相良 ゆかり 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

「鹿児島県における高度難聴児の早期発見と

早期療育の現状と問題点について」

鹿島 直子 先生（鹿児島市立病院 耳鼻いんこう科）

4. 第41回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会（平成18年7月27日）

特別講演：「耳鼻咽喉科領域の危ない感染症」

川内 秀之 先生（島根大学医学部 耳鼻咽喉科 教授）

一般演題：「上顎に発生した小児 Ewing 肉腫/

primitive Neuroectodermal Tumor (PNET) の一例」

川島 雅樹 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

「顔面神経鞘腫の一例」

相良 ゆかり 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

5. 第42回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会（平成18年8月24日）

特別講演：「顔面神経麻痺診療のガイドライン」

青柳 優 先生

（山形大学医学部耳鼻咽喉・頭頸部外科学分野 教授）

一般演題：「小児 OSAS 症例に対する手術治療と術後評価」

田中 紀充 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

「当科における原発不明癌の検討」

林 多聞 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

6. 第36回日本耳鼻咽喉科感染症研究会（平成18年9月1日・2日）（鹿児島）

シンポジウム

「周術期の感染症対策－現状と問題点－」

頭頸部癌手術の周術期感染予防に関する検討

福岩達哉，黒野祐一

ディベート

「扁桃周囲膿瘍に対する膿瘍扁桃摘術」

－即時膿瘍扁桃摘術の立場から－

西元謙吾

第30回日本医用エアロゾル研究会（平成18年9月1日）（鹿児島）

シンポジウム

「代替医療としてのエアロゾル療法－温熱エアロゾル療法－」

松根彰志

一般演題

「スギ花粉症に対する初期療法としての塩酸レボカバステン点鼻液の有用性」

宮之原郁代，松根彰志，相良ゆかり，西元謙吾，黒野祐一

7. 第43回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会（平成18年9月14日）

特別講演：「多彩な唾液腺疾患の治療」

吉原 俊雄 先生（東京女子医科大学 耳鼻咽喉科 教授）

一般演題：「当科における両側異時性突発性難聴の治療経験」

下麥 哲也 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

「頭蓋顔面多発骨折の治療経験」

大堀 純一郎 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

8. 第12回南九州上気道感染症臨床懇話会（平成18年10月12日）

特別講演：「鼻内視鏡手術の適応と限界」

春名 眞一 先生（獨協医科大学 耳鼻咽喉科学 教授）

一般講演：「頭頸部癌手術の周術期感染予防に関する検討」

福岩 達也 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

「即時膿瘍扁桃術の利点と問題点」

西元 謙吾 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

9. 第8回上気道アレルギー疾患を考える会（平成18年11月16日）

特別講演：「職業鼻アレルギーとその対策」

宇佐神 篤 先生

（うさみクリニック 副院長，東海花粉研究所 所長）

一般演題：「郵送法を用いた2006年スギ花粉飛散ピーク期 QOL 調査の検討」

宮之原 郁代 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

「鼻粘膜における血管透過性亢進作用 VEGF vs ヒスタミン」

松根 彰志 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

10. 第44回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会（平成19年1月25日）

特別講演：「One airway, one disease の概念と上気道炎症性疾患のかかわり」

湯田 厚司 先生

（三重大学大学院医学研究科耳鼻咽喉・頭頸部外科学 講師）

一般演題：「プラシラカストのスギ花粉症初期療法薬としての有用性」

宮之原 郁代先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

「音声保存喉頭重全摘術の症例」

花牟禮 豊 先生（鹿児島市立病院 耳鼻いんこう科）

11. 第45回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会（平成19年3月15日）

特別講演：「頭頸部癌に魅せられた30年を顧みて頭頸部がん専門医養成システムを考える」

鎌田 信悦 先生

（国際医療福祉大学三田病院 頭頸部腫瘍センター 教授）

一般演題：「使用実態調査からアレルギー性鼻炎における

第2世代抗ヒスタミン薬の選択基準の検討」

宮之原 郁代 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

「自家遊離組織移植を用いた頭頸部癌切除後再建における

静脈還流不全の検討」

福岩 達哉先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

2. 第36回日本耳鼻咽喉科感染症研究会・
第30回日本医用エアロゾル研究会

会長 黒野祐一（鹿児島大学）

平成18年9月1日、2日の2日間、鹿児島市城山観光ホテルにて第36回日本耳鼻咽喉科感染症研究会ならび第30回日本医用エアロゾル研究会を開催しました。鹿児島での日本耳鼻咽喉科感染症研究会・日本医用エアロゾル研究会は、24年前に先代の大山教授が主催して以来2回目になります。今回の日本医用エアロゾル研究会は第30回の記念大会で記念式典の関係上、通常初日に日本耳鼻咽喉科感染症研究会、2日目に日本医用エアロゾル研究会を開催するところを、1日目の午前中に日本耳鼻咽喉科感染症研究会、午後日本医用エアロゾル研究会、2日目にまた日本耳鼻咽喉科感染症研究会を行うといった変則日程となりました。しかし、この日程が幸いしてか、エアロゾル研究会そして記念式典にもたくさんの先生方に参加していただくことができ主催者として大変嬉しく思

いました。また、9月の鹿児島は暑さも厳しいので、会期中はクール・ビズで統一させていただきました。

今日でも感染症は日常診療で遭遇する機会の多い疾患であり、また、抗菌薬などの治療は常に進化を求められています。しかし、膿瘍形成したものや膿汁の貯留したもの、術後の感染などは、外科的な処置が重要であることに変わりはありません。耳鼻咽喉科領域における感染症の特徴として、ある程度の症例は保存的に治癒せしめることができるが、症例によっては外科的な処置を施すことによって劇的に改善させることであります。また、外科的処置の機を逸することにより重大な合併症を引き起こす可能性を秘めた疾患も多数あり、耳鼻咽喉科感染症と外科的処置は切っても切れない関係にあります。そこで、今回の日本耳鼻咽喉科研究会では「耳鼻咽喉科感染症と外科的処置」をテーマとしてとりあげ、シンポジウム、ディベートを企画しました。

シンポジウムでは、「周術期の感染症対策－現状と問題点－」と題して山口大学の山下裕司先生、藤田保健衛生大学の鈴木賢二先生のご司会の下、活発な討議がなされました。藤澤利行先生（藤田保健衛生大学）には、耳鼻咽喉科領域においても増加しつつある日帰り手術に対する抗菌薬の使用法について、綿貫浩一先生（山口大学）には、副鼻腔・頸部小手術の短期入院手術における抗菌薬投与の工夫について、山本裕先生（新潟大学）には、耳鼻咽喉科領域で常に問題となる耐性菌である MRSA 感染症の中で、特に中耳炎手術における注意点と問題点について、福岩達哉先生（鹿児島大学）には、頭頸部癌手術の周術期の感染症対策について、大毛宏喜先生（広島大学外科）には、外科医の立場から周術期の感染予防における本邦と米国との違いについてそれぞれ講演をいただき、会員の先生方にも役立つものだったと思います。

最近、いくつかの学会で試みられているディベートを「鼓膜切開」と「扁桃周囲膿瘍に対する膿瘍扁桃摘術」の2つ企画しました。これら2つのテーマは、外科的に治療するか保存的に治療するか論議の別れるところですが、それぞれ推進派、否定派に分かれて別々の立場から論議していただきました。「鼓膜切開」については、自治医科大学付属大宮医療センターの飯野ゆき子先生のご司会の下、賛成側の立場から宇野芳史先生（宇野耳鼻咽喉科クリニック）、反対側の立場から上出洋介先生（かみで耳鼻咽喉科クリニック）のお二人に討議していただき賛否両論を会員の先生方にも吟味していただけたと思います。「扁桃周囲膿瘍に対する膿瘍扁桃摘術」については、大分大学の鈴木正志先生のご司会の下、賛成側の立場から西元謙吾先生（鹿児島大学）、反対側の立場から余田敬子先生（東京女子医科大学）のお二人に討議いただき、扁桃周囲膿瘍に対する膿瘍扁桃摘術は条件が整えばこれまで禁忌とされていたこの手術も有効であることが示されました。

ランチオンセミナーは2つ企画し、その1つは東海大学医学部基礎医学系教授の古賀泰裕先生に「Hygiene hypothesis に基づくアレルギー発症に対する腸内フローラ介入

の効果」と題して、感染症やアレルギー疾患予防において現在注目されているプロバイオテイクスに関する最新的话题を提供していただきました。

もう1つは、ICHG 研究会代表の波多江新平先生に「感染予防対策の具体的手順とその実践」と題して、日常の診療における感染予防対策を防御具、手洗い、消毒などの具体的事例を取り上げていただき、我々医療従事者の対応を事細かに解説していただきました。

一般演題では、例年とほぼ同じ40題の演題をいただきました。今回は特に深頸部感染症の演題が多く、耳鼻咽喉科領域の危険な感染症が依然問題となっていることが浮き彫りにされました。それぞれの演題で多岐にわたる内容の討議が重ねられ、興味深い演題も多数ありましたが、内容については来年発行される日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌で参照していただきたいと思えます。

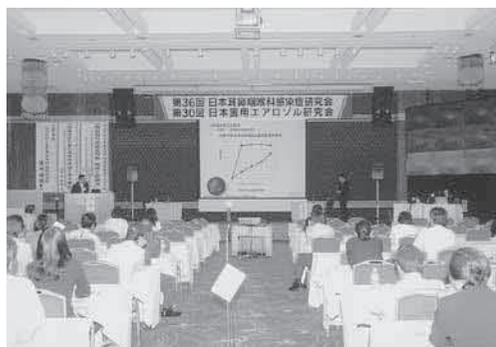
日本医用エアロゾル研究会は、第30回という記念すべき節目にあたる研究会となりました。エアロゾル療法はこの30回の研究会の中で、討議を重ねていった結果、多くの発見や器械改良がなされてきました。その代表的な治療がネブライザー療法ですが、実際にその原理と進歩の経緯についてはほとんど語られることがなく漫然と使用していた感があります。そこで、今回は、本研究会の運営委員長である三重大学の間島雄一先生に「耳鼻咽喉科とエアロゾル療法－日本医用エアロゾル研究会30年の歩み－」と題しました基調講演をお願いしました。この中で、過去30年に日本医用エアロゾル研究会で発表されたエアロゾル療法の基礎的、臨床的研究の review をしていただき、理論武装に役立つような研究や適切なエアロゾル療法を施行するための情報を示していただきました。また、永年にわたり日本医用エアロゾル研究会の発展に貢献された先生方の栄誉をたたえると共に感謝の意を表して記念式典を開催させていただきました。功労者として板倉康夫先生、馬場駿吉先生、菊池恭三先生、佐藤素一先生の4人が表彰されました。

シンポジウムはエアロゾル療法のさらなる進歩を期して、「エアロゾル療法の夢（未来）を語る」をテーマに、エアロゾル療法をこれからどのように使っていったらいいかという未来の夢を5人の先生方に講演していただきました。帝京大学溝口病院の石塚洋一先生と東邦大学大橋病院の大越俊夫先生のご司会の下、松根彰志先生（鹿児島大学）には、主にアレルギー性鼻炎に対する代替療法としての温熱エアロゾル療法について、荻野敏先生（大阪大学）には、局所温熱療法に変わりうるミストサウナについて、内藤健晴先生（藤田保健衛生大学）には、咽喉頭に対するエアロゾル療法の今後の展望について、大野伸晃先生（名古屋市立大学）には、ナノテクノロジーやDDSを用いた次世代の鼻ネブライザー用薬品についてお話いただき、最後に黒野から経鼻ワクチンについての追加発言をさせていただきました。

その他、特別講演として、日本経済新聞が企画した全国焼酎コンテストで見事第1位

の栄冠に輝いた薩摩焼酎「佐藤」の生みの親である佐藤誠氏に「人々と焼酎」と題して焼酎造りの秘話や苦労話をお話していただきました。この特別講演の余韻にひたっていた後で、合同会員懇親会では薩摩焼酎を会員の皆様方に堪能していただけたと思います。

両研究会の総参加者数は約200名となり、ご発表ならびにご参加いただいた皆様、鹿児島県地方部会、同門会の先生方には心から御礼申し上げます。 (文責：西元)



3. 第9回 耳鼻咽喉科桜島フォーラム

稀な症例・問題症例を開業の先生方、関連病院の先生方と共に検討していく耳鼻咽喉科桜島フォーラムも今回で9回目を迎えました。年末の忙しい時期にもかかわらず今回も多数の先生方に御参加頂きました。

今回から趣向を変えて、症例の検討をパネルディスカッション形式にしました。まず、症例検討のテーマを「頸部腫瘍の診断」として挙げ、診断の困難であった症例を各施設持ち合い、発表後にパネリストが検討しました。

研究報告では学位取得の予定である大堀先生と田中先生が現在の教室における研究の紹介をさせていただきました。

教育講演では黒野教授が「浸出性中耳炎の間違ったとり扱い」として、浸出性中耳炎のわかっていそうでわからない事を詳しく述べていただきました。

第9回 「耳鼻咽喉科桜島フォーラム」

平成18年12月7日（木） 19:00～21:00

鹿児島県医師会館中ホール2

司会：西元 謙吾

I. 開会の挨拶

黒野 祐一 教授

II. 症例検討 テーマ「頸部腫瘍の診断」

- | | | |
|-------------------|------------|----------|
| 1. 鹿児島大学聴覚頭頸部疾患学 | 「原発不明癌」 | 林 多聞 先生 |
| 2. 鹿児島医療センター耳鼻咽喉科 | 「頸部嚢胞」 | 松崎 勉 先生 |
| 3. 前県立大島病院耳鼻咽喉科 | 「頸部リンパ節結核」 | 出口 浩二 先生 |

－パネルディスカッション－

III. 研究報告

- | | |
|--|----------|
| 1. 「鼻茸由来線維芽細胞において TNF- α は VCAM-1発現と NF- κ B 活性化を亢進する」 | 大堀純一郎 先生 |
| 2. 「マウスにおける phosphorylcholine 経鼻投与に対する粘膜および全身免疫応答」 | 田中 紀之 先生 |

IV. 教育講演

「浸出性中耳炎の間違ったとり扱い」 黒野 祐一 教授

今後も皆様にたくさんの御意見をいただけるよう企画を工夫していきたいと存じます。

(文責：西元)

4. 第7回 耳鼻咽喉科 鼻の日 市民講座

毎年恒例となっております、「鼻の日」（8月7日）市民講座を今回も以下の要領で開催いたしました。57名の一般市民が参加され、大変熱心に聴講いただきました。今回で第7回となりましたが、マンネリ化することのないよう企画内容にも工夫を加えながら継続していきたいと思っております。

テーマ 「注意！！ 鼻の病気は万病のもと」

と き 平成18年8月12日（土）、午後3時（2時30分より受付）

ところ 鹿児島中央駅前 キャンセ多目的ホール 入場・受講料/無料

対 象 / 一般市民

講演内容 午後3時～5時

1. 鼻の病気と嗅覚，味覚障害

鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科 講師 西元謙吾 先生

2. 鼻の病気といびき，無呼吸

県立大島病院 耳鼻咽喉科部長 出口浩二 先生

－休憩－

3. 無呼吸症候群と生活習慣病の実態

鹿児島厚生連病院 呼吸器内科 部長 長濱博行 先生

4. 検査をきちっと受けましょう

指宿鮫島病院 理事長 鮫島康高 先生

（文責：松根彰志）

5. 耳の日 市民公開講座 「知っておきたい耳の病気」

平成19年3月11日（日）、13時30分～15時20分、

鹿児島県医師会館（鹿児島中央駅前）3階中ホール

耳の日市民公開講座も今年で3回目を迎えました。日耳鼻鹿児島県地方部会・鹿児島県耳鼻咽喉科医会の共催にて今年以下は以下のプログラムで行いました。耳に関する話題として取り上げるテーマも出尽くした感があり、今後工夫が必要かと思われました。また、講演終了後にアンケートを実施したのですが、その結果を見ると、約4割の方が講

義内容を少し難しく感じられたようです。最後に今回ご協力いただきました多くの皆さまにこの場をかりて厚くお礼申し上げます。

●プログラム

I. 特別講演 (13:30~14:50)

1) 耳のしくみと働き

鹿児島大学大学院 耳鼻咽喉科 福岩達哉先生

2) 気をつけたいこどもの中耳炎

鹿児島大学大学院 耳鼻咽喉科 林 多聞先生

3) 耳の病気とめまい

鹿児島大学大学院 耳鼻咽喉科 相良ゆかり先生

II. 質問コーナー(14:50~)

●アンケート結果 (出席者27名, アンケート回収率89%)

1) 今回の講座についてどのようにして知りましたか?

新聞 63%

ポスター 4%

その他 33%

2) 講演内容はいかがでしたか?

わかりやすい 58%

ややわかりにくい 38%

むずかしすぎる 4%

3) 講演時間はいかがでしたか?

ちょうどよい 92%

短い 0%

長い 0%

無回答 8%

4) 講演日程はいかがでしたか?

土曜日午後がよい 38%

日曜日午後でよい 63%

平日夜がよい 8%

回答なし 4%

(複数回答あり)

(文責：宮之原郁代)

6. 2006年水曜セミナー

毎週水曜日は、8:00～8:30の30分の時間、各先生の持ち回りで、セミナーを行っております。臨床的なものを中心とした題材となるようにしています。

黒野祐一

喘息治療戦略の将来～G Lの観点から～国際ガイドライン ARIA から
鼻アレルギー診療ガイドラインにおけるロイコトリエン拮抗薬の位置づけ

松根彰志

アレルギー性鼻炎における血管内皮細胞と好酸球浸潤

宮之原郁代

花粉症に対する初期療法の有用性
内リンパ水腫病態に対する鼓室内注入療法～適応と問題点～
鼻粘膜過敏性亢進のメカニズム－ヒスタミンレセプターに対する調節機構－

西元謙吾

即時膿瘍扁桃術の術中・術後出血について
声門下狭窄に対する対応について
喉頭披裂部・下咽頭に進展した白斑病変 Esophageal intramural pseudodiverticulosis (EIPD)

福岩達哉

GERD と耳鼻咽喉科疾患について
急性喉頭蓋炎 訴訟になった症例の検討

相良ゆかり

顔面神経鞘腫について
痙攣性発声障害に対するボツリヌストキシン注入療法
顔面神経麻痺とウイルス関与

林 多聞

原発不明頸部リンパ節転移の症例について
舌 T 1 T 2 症例の予防的頸部郭清術の必要性について

吉福孝介

プラシラカストの鼻茸好酸球浸潤抑制に関する臨床的検討

大堀純一郎

侵襲性アスペルギローシス

フルチカゾン点鼻の有効性について

絨毛運動不全症候群

下麥哲也

突発性難聴～当科の検討について～

田中紀充

好酸球浸潤の強い反応性リンパ節炎

睡眠呼吸障害 睡眠時無呼吸症候群の診断 簡易モニターと PSG の位置づけ

早水佳子

当科における扁桃摘出術の検討について

AIDS

原田みずえ

逆生菌について

反復性中耳炎と免疫不全症

宮下圭一

当科における急性喉頭蓋炎の検討～特に緊急気管切開を要した症例について～

川畠雅樹

肺炎球菌の接着分子について－Chop を中心に－

Biofilm Infection

鼻副鼻腔腫瘍の鑑別－画像診断を中心に－

牧瀬高穂

Basaloid Squamous Cell Carcinoma

Inverted papilloma

(敬称略)

(文責：早水)

7. 第13回 アレルギー週間

(財)日本アレルギー協会が、石坂公成先生がIgE抗体を発見された2月20日を「アレルギーの日」と制定したことによる、「アレルギー週間」(アレルギーの日前後1週間)に今回も市民講座(参加費無料)を開催いたしました。アレルギー週間に市民講座を鹿児島で開催するのは、昨年が続いて2回目です。

新聞広告などで、広報いたしましたところ、当日、65名の一般市民の皆さんが参加され、質疑応答なども活発に行われました。今回の内容は以下のごとくでした。

日時 平成18年2月4日(日)13時30分～15時30分

場所 楽天KCプラザ ピアノホール(鹿児島市東千石町)

講演

- | | | | |
|-------------------|---------|-------|------|
| 1. アレルギー性鼻炎と副鼻腔炎 | 鹿児島大学病院 | 耳鼻咽喉科 | 松根彰志 |
| 2. 最近の喘息治療法 | 鹿児島大学病院 | 呼吸器内科 | 東元一晃 |
| 3. アトピー性皮膚炎とスキンケア | 鹿児島大学病院 | 皮膚科 | 吉井典子 |

主催

(財)日本アレルギー協会 九州支部

鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科

(文責：松根彰志)

同 門 会 総 会

平成19年1月13日（土）午後5時より、鹿児島県医師会館の3階中ホールにて同門会総会が開催されました。平成18年の事業報告並びに会計報告さらには、平成19年の事業計画ならびに予算案が承認されました。

平成18年から会費が既に、開業医10,000円、勤務医4,000円に値上げされており、おかげさまで、会計報告や予算案も内容的にも収支バランス的にも健全なものとなりました。さらに、同門会員の皆様の御協力、御高配により、日本耳鼻咽喉科学会関連学会である、第35回日本耳鼻咽喉科感染症研究会、第30回日本医用エアロゾル研究会（平成18年9月1日、2日）も盛会のうちに無事主催を終えることができました。

今回は、同門会役員会の改選時期でありました。役員会ならびに総会を経て選出されました役員は以下のごとくです。（敬称略）任期は3年です。平成22年の同門会総会で改選となります。

＜新役員会メンバー＞

会長 山本 誠

顧問 大山 勝、黒野祐一

理事 上村達郎、勝田兼司、高木 茂、昇 卓夫、嘉川須美二、小幡悦朗、花牟礼豊、
齊藤 寿、大堀八洲一、内菌明裕、松崎 勉、今給黎泰二郎

監事 上野員義、森山一郎

幹事 松根彰志

総会終了後、地方部会と合同の学術講演会を開催しました。一般演題の部、特別講演の部と内容は以下のごとくでした。また、例年どおり記念撮影も行われ、午後8時から、同会館、3階中ホールにて新年会も兼ねた懇親会が開催されました。

（文責：松根彰志）

学術講演会（同門会と地方部会の合同）

一般演題

座長 松崎 勉（鹿児島医療センター 耳鼻咽喉科）

1. 小児睡眠時無呼吸症候群の手術適応に関する検討
宮下圭一，田中紀充，松根彰志，黒野祐一
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 聴覚頭頸部疾患学
2. 巨大喉頭蓋嚢胞が疑われた1例
高木実(1)，平瀬博之(1)，押領司友和(2)，稲留昌彦(2)，山下明子(2)
県民健康プラザ鹿屋医療センター (1)耳鼻咽喉科 (2)麻酔科
3. 前頭窩に進展した副鼻腔原発内反性乳頭腫の1例
下麦哲也，小松原幸子，花牟礼豊
鹿児島市立病院 耳鼻いんこう科

座長 花牟礼豊（鹿児島市立病院 耳鼻いんこう科）

4. 両側に発症した中耳癌の一例
伊瀬知恵理子，谷本洋一郎，松崎 勉
鹿児島医療センター 耳鼻咽喉科
5. 開口障害，嚥下困難を認めた破傷風の1症例について
永野広海，吉福孝介
県立大島病院 耳鼻咽喉科

特別講演

座長 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 教授 黒野祐一

メニエール病の臨床と研究

琉球大学医学部耳鼻咽喉・頭頸部外科学 教授 鈴木幹男 先生



鹿兒島大学大学院聴覚頭頸部疾患学教室同門会総会 平成19年1月13日 於、鹿兒島県医師会館

1. 巡回診療（県医務課）

- 上甑村 （6月25日～6月26日）
- 下甑村 （7月11日～7月13日）
- 三島村 （7月18日～7月23日）
- 十島村 （8月25日～8月29日）
（9月12日～9月14日）

2. 身体障害者巡回診療

- 7月 十島村（平島）
- 8月 三島村（硫黄島）
- 9月 屋久町，上屋久町
- 10月 薩摩川内市鹿島支所・薩摩川内市下甑支所

3. 学校保健（統計報告）

平成18年4月から6月にかけて、当科において鹿児島県下の以下の耳鼻咽喉科学校検診を行った。

【対象地域】

鹿児島市，阿久根市，垂水市，西之表町，大崎町，松山町

【受診者数】

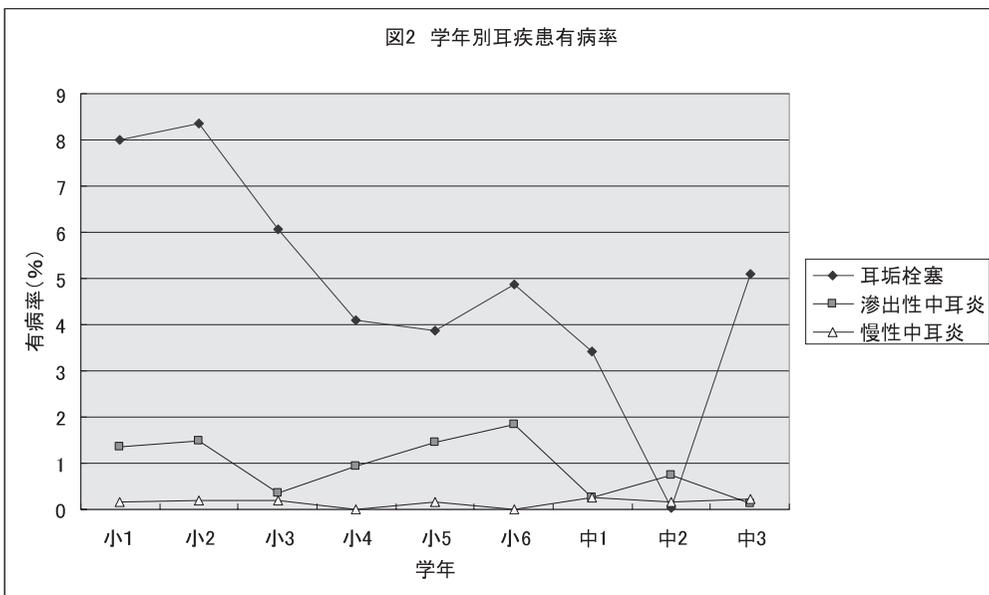
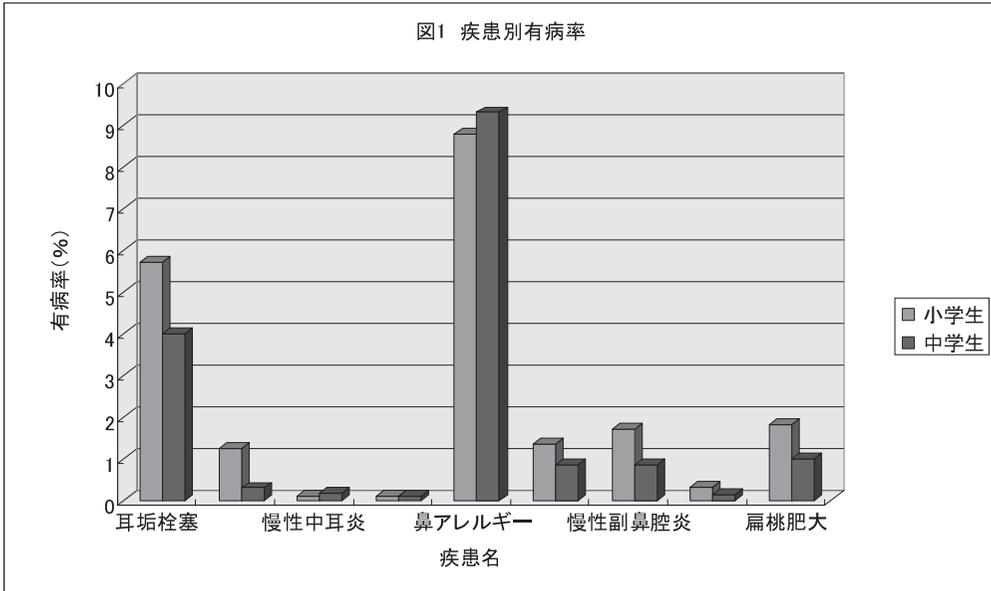
小学生3,704名，中学生2,759名

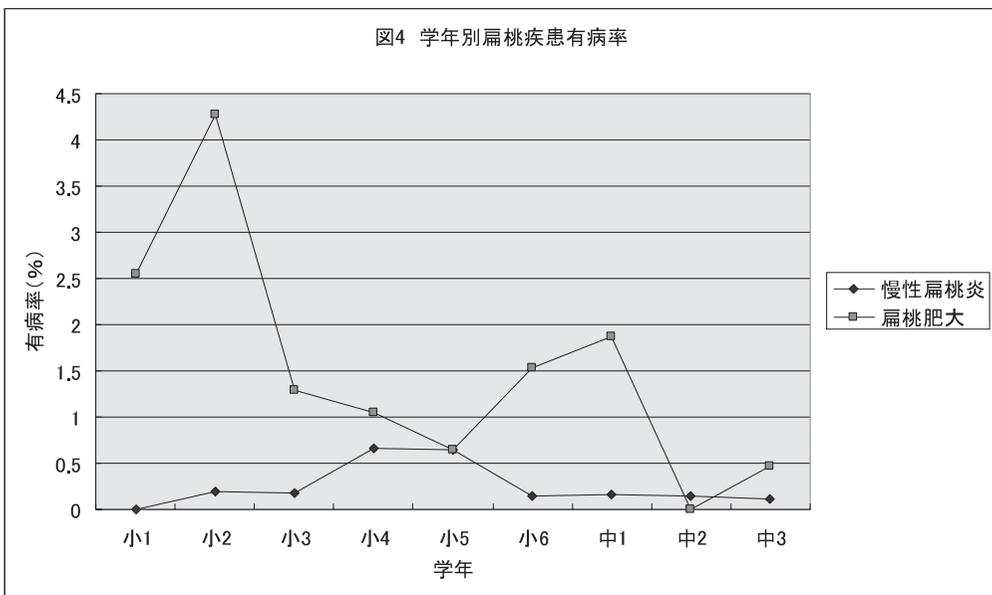
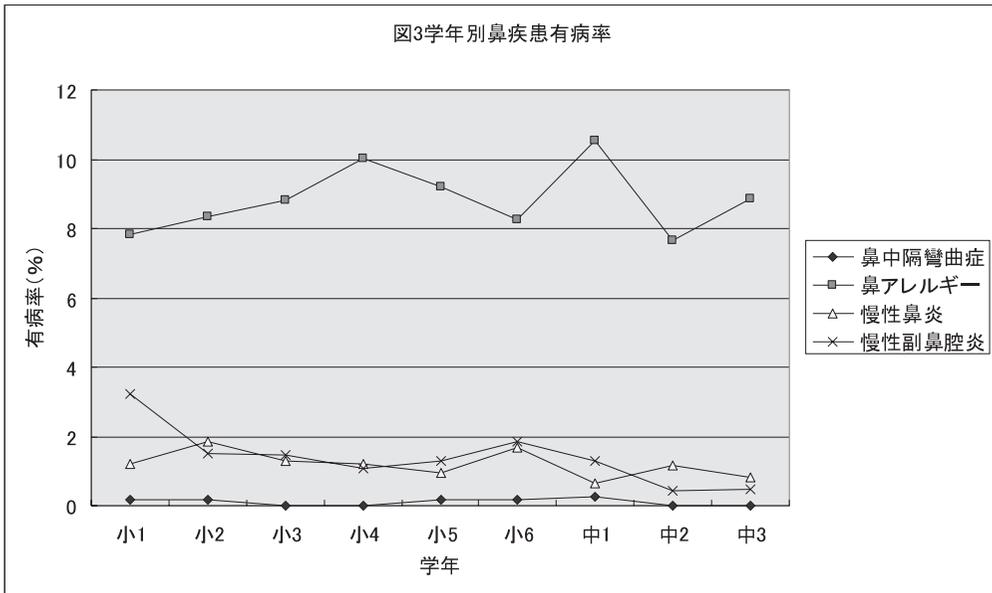
【対象疾患】

耳垢栓塞，滲出性中耳炎，慢性中耳炎，鼻中隔彎曲症，鼻アレルギー，慢性鼻炎，慢性副鼻腔炎，扁桃肥大 の 9 疾患

【結果】

疾患別の有病率については、ここ数年の傾向どおり、鼻アレルギーが圧倒的に多く1割前後であった。ついで、耳垢栓塞，慢性副鼻腔炎の順であった（図1）。耳疾患についての有病率のみで見ると、学年とともに低下傾向を認めたが、慢性中耳炎については、どの学年でも同様であった（図2）。鼻疾患では、学年ごとにばらつきはあるものの、1割前後の有病率であった（図3）。扁桃疾患については扁桃肥大は、ばらつきはあるものの学年とともに減少傾向であった。





1. アレルギー外来

特殊外来として毎週月曜日の14時から16時までアレルギー外来を行っております。

平成16年度のアレルギー外来受診者数は合計125名（男性62名，女性63名），平成17年は合計168名（男性92名，女性76名），平成18年度は合計123名（男性65名，女性58名）でした。平成17年度にやや増加傾向（とくに男性）が認められます。内訳を見てみるとスギ花粉症の方の割合が，16年度は21人で16.8%，17年度は32人で19.1%，18年度は32人で26.1%，と年々，スギ花粉症の方の割合が多くなる傾向を認めました。

今年はスギ花粉の飛散開始時期が遅く，例年に比べ患者さんはそれほど多くなかったようですが，アレルギー外来を受診されるスギ花粉症の方は飛散開始前の治療も周知されていたようでした。症状のコントロールはうまく行われていたようです。今後も特殊外来としてアレルギー外来をすすめていきたいと思えます。（文責：相良ゆかり）

2. 副鼻腔炎外来

毎週木曜日の午前中を中心に，内視鏡下鼻内副鼻腔手術の術後経過を観察し，適宜必要な処置を行うことを目的に継続してきました。最近では，好酸球性副鼻腔炎症例を中心とした臨床研究を中心として行ってきました。

今年は，これらの内容が，ようやく2つの論文発表として形になりそうです。1つは，現在県立大島病院に赴任中の吉福先生が，第1著者となって原稿を書してくれた「プランルカストの鼻茸への好酸球浸潤の抑制効果」（邦文で投稿準備中）であり，また，もう1つは，現在は東海大学医学部に教授（基礎医学系分子生命科学）で移られた，井ノ上逸朗先生が東大医科研時代から当教室と共同研究として進めてきました研究が，「Gene-Expression profiles in human nasal polyp tissues from aspirin intolerant asthma patients and identification of the genetic susceptibility」というタイトルで近く英文誌に投稿できそうです。

これらの論文が「とらぬ狸」にならないようやるべきことをしっかりやっていきたいと思えます。

副鼻腔炎の内視鏡手術による治療経過で，嗅覚の改善の有無や程度は大変重要なポイントの一つですが，この間全国的な「嗅覚検討委員会」の検討に参加する形で，術前術後（1ヶ月，3ヶ月）の嗅覚評価を主治医になった先生方に頑張ってもらっていただきました。これらのデータは，川島先生に「委員会プロトコール」（T&T，スティック型嗅覚検査，アリナミンテスト，VASスコア）に沿ってまとめていただき，日耳

鼻総会や鼻科学会で委員会が開かれるたびに提出してきました。嗅覚検査の日常診療における普及は、保険診療上、現在、1つの壁にぶつかっていると思いますが、学問的にも社療的にも意味のあるデータの蓄積に今後とも可能な限り協力していけたらと考えています。
(文責：松根彰志)

3. 一頭頸部腫瘍外来一

毎週木曜日午前中に開設している頭頸部腫瘍外来ですが、平成19年1月から大学で導入された電子カルテの影響で予約制がかなり進んだ外来になっています。まず、診察前の採血が必要な患者は早めに来院し採血を済ませるように予約しておきます。採血項目もあらかじめ入力しておきますので誰でも採血できるようになりました。将来的には中央採血室に採血が全面的に依頼されますので朝の雑然とした採血の風景も無くなると思われまます。

患者は主治医が決まっている時はその主治医の予約枠で、主治医がいない場合には一般の予約枠で1時間あたり6人を上限として入力できます。これまでは時間指定まではできなかったのですが患者によっては2時間、3時間待ちのこともありましたが、少なくとも採血のない患者の診察は大幅に待ち時間が短縮されたと思います。今後もこの電子カルテの予約システムを活用して円滑に外来業務が進むように努力していきたいと考えています。

平成18年1月から平成18年12月までに入院加療した悪性腫瘍患者（新規：悪性リンパ腫を除く）

喉頭癌	：17例
中咽頭癌	：10例
口腔癌	：8例
鼻副鼻腔癌	：6例
下咽頭癌	：3例
原発不明癌	：3例
甲状腺癌	：3例
耳下腺癌	：2例
聴器癌	：2例
唾液腺癌	：2例
上咽頭癌	：1例
計	53例

最近、腫瘍外来で行っている検討は、

1. TS_1 と UFT の術後投与による再発予防効果の検討
2. 放射線性口腔乾燥症に対する塩酸ピロカルピンの臨床効果

の2つです。先生方の御協力の元進めていきたいと存じますので、症例の御紹介の程よろしく願い申し上げます。(文責：西元)

4. 難聴・耳鳴り外来

難聴・耳鳴り外来

金曜日（午後）（月3回）

補聴器外来

毎週月（終日）・水（午前）

いずれも一旦初診（月・水・金 午前）で受診の上予約が必要です。

難聴・耳鳴り外来は、2003年4月に開設以来、本年で4年を迎えるところです。現在も、持続して新規患者のエントリーがあり、2006年1月から12月までのべ患者数は147名でした。

補聴器外来では、補聴器フィッティングから聴覚障害についての管理指導・患者啓蒙を行っています。2006年1月から12月までのべ患者数は110名でした。

(文責：宮之原郁代)

総施行件数		724	(2006.04～2007.03)	
病棟		413		
外来		311		
腫瘍	悪性		良性	
喉頭腫瘍	SCC	38	Papilloma	5
	SCC in situ	1		
	Basaloid SCC	1		
	Papillary carcinoma	1		
甲状腺腫瘍	Papillary carcinoma	7	Follicular adenoma	4
上咽頭腫瘍	SCC	4	Adenomatous hyperple	1
			Hemangioma	1
中咽頭腫瘍	SCC	14	Squamous papilloma	1
	Papillary carcinoma	2		
下咽頭腫瘍	SCC	15		
副咽頭腫瘍	SCC	1	Pleomorphic adenoma	2
上顎洞腫瘍	SCC	4	Spindle cell tumor	1
	Adenomatoid odontogenic tumor	1	Solitary fibrous tumor	1
	Malignant fibrous histiocytoma	1		
鼻腔腫瘍	SCC	3	Inverted papilloma	7
	Malignant melanoma	3	Squamous papilloma	2
	Acinic cell carcinoma	2	Hemangioma	2
	Chondrosarcoma	2	Angiofibroma	1
耳下腺腫瘍	SCC	1	Warthin tumor	11
	Sebaceous carcinoma	1	Pleomorphic adenoma	30
	Mucoepidermoid carcinoma	1	Oncocytoma	2
	Epithelial-myoeplithelial carcinoma	1	Basal cell adenoma	2
舌腫瘍	SCC	20	Papilloma	2
	Papillary carcinoma	1	Fibroma	1
	Sclerosing epithelioid fibrosarcoma	1		
口腔腫瘍	SCC	5		
軟口蓋腫瘍	SCC	3		
	Adenocarcinoma	1		
歯肉腫瘍	SCC	1		
	Malignant meranoma	1		
口腔底腫瘍	SCC	2		
歯根部腫瘍	SCC in situ	2		
耳介腫瘍			Fibrofoliculoma	1
			Squamous papilloma	1
外耳道腫瘍	SCC	1	Ceruminal adenoma	1
上眼瞼腫瘍	SCC	1		
頬骨腫瘍	Langerhans cell histiocytosis	1		
頸部腫瘍			Lipoma	2
その他	Malignant lymphoma(non-Hodgkin)	6		
	Malignant lymphoma(Hodgkin)	1		
	Angioimmunoblastic T-cell lymphoma	1		
前癌病変	Dysplasia	10		

(平成19年4月現在)

文部科学省科学研究費

基盤研究 (B) (2)

新世代広域スペクトラム経鼻ワクチンの開発とその有効性に関する研究

代表者 黒野祐一

分担者 松根彰志 西元謙吾 福岩達哉 小田 紘

若手研究 (B)

長期持続型経鼻ワクチンの開発とその有効性に関する研究

代表者 福岩達哉

若手研究 (B)

IgA 腎症における口蓋扁桃B細胞の免疫学的作用

～扁桃の適応基準設定をめざして～

代表者 田中紀充

厚生労働省科学研究費補助金

代替医療の実施と有効性の科学的評価

主任研究者 岡元美孝 (千葉大学 耳鼻咽喉科・頭頸部腫瘍学)

分担研究者 黒野祐一

1. 原 著

- (1) 西元謙吾, 大堀純一郎, 早水佳子, 福岩達哉, 相良ゆかり, 黒野祐一
「扁桃周囲膿瘍の膿瘍局在部位と臨床像」
日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 24(1) : 105-108, 2006
- (2) 西元謙吾, 下麥哲也, 出口浩二, 黒野祐一
「鼻粘膜病変による鼻閉を初期症状としたサルコイドーシス症例」
アレルギーの臨床 26(10) : 62(794)-65(797), 2006
- (3) 川島雅樹, 西元謙吾, 相良ゆかり, 福岩達哉, 黒野祐一
「喉頭癌の治療前診断としてのPETの有用性についての検討」
喉頭 18(2) : 137-140, 2006
- (4) Tanaka, N., Fukuyama, S., Fukuiwa, T., Kawabata, M., Sagara, Y., Ito, H., Miwa, Y.,
Nagatake, T., Kiyono, H. and Kurono, Y
Intranasal immunization with phosphorylcholine induces antigen specific mucosal and sys-
temic immune responses in mice
Vaccine 25(14) 2680-2687, 2007
- (5) 宮之原郁代, 松根彰志, 相良ゆかり, 西元謙吾, 黒野祐一
「スギ花粉症に対する初期療法としての塩酸レボカバステン点鼻液の有用性」
耳鼻と臨床 53(1) : 34-39, 2007
- (6) Kim HD, Tahara K, Maxwell JA, Lalonde R, Fukuiwa T, Fujihashi K, Van Kampen KR,
Kong FK, Tang DC, Fukuchi K
Nasal inoculation of an adenovirus vector encoding 11 tandem repeats of Abeta1-6
upregulates IL-10 expression and reduces amyloid load in a Mo/Hu APPswe PS1dE9
mouse model of Alzheimer's disease. J Gene
Med. Feb; 9(2): 88-98, 2007

- (7) J.Ohori, S.Ushikai, Dong Sun, K.Nishimoto, Y.Sagara, T.Fukuiwa, S.Matsune, Y.Kurono
TNF- α upregulates VCAM-1 and NF- κ B in fibroblasts from nasal polyps
Auris Nasus Larynx in press 34 : 177-183, 2007

2. 著 書

- (1) 松根彰志, 田中紀充, 黒野祐一
「鼻骨骨折整復術」
耳鼻咽喉科・頭頸部外科 外来手術の基本テクニク 67-69, 2006
- (2) 黒野祐一
「Mastering Revision Rhinoplasty」
Springer Science and Business Media, Inc.
United States of America, 2006

3. 総 説

- (1) 松根彰志, 大堀純一郎, 黒野祐一
特集 アレルギー疾患におけるリモデリング II
鼻アレルギーにおけるリモデリング
-Th2型サイトカイン, VEGF, 好酸球とリモデリング-
アレルギー・免疫 8(13):25(1119)-29(1123), 2006
- (2) 黒野祐一
上気道粘膜免疫とアレルギー
-その接点と今後の展開-
Kyusyu Kyohkai News (日本アレルギー協会九州支部) June. 2006
- (3) 黒野祐一
疾患から見た感染症の治療-耳鼻咽喉科-
副鼻腔炎・中耳炎
2006年改訂版 最新 感染症治療指針 155-161, 2006

- (4) 松根彰志, 黒野祐一
特集 スポーツと耳鼻咽喉科疾患
3・鼻・副鼻腔
耳鼻咽喉科・頭頸部外科 78 (11) : 849-852, 2006
- (5) 松根彰志
- 研修ノート -
上下気道慢性炎症の診断と治療
耳鼻臨床 99(10) : 888-889, 2006
- (6) 松根彰志, 林 多聞, 黒野祐一
特集・滲出性中耳炎 update
滲出性中耳炎に対するアデノイド切除の有用性について
MB ENT, 68 : 43-46, 2006
- (7) 黒野祐一, 相良ゆかり
特集① 新しい鼻アレルギー診療ガイドライン Q&A 治療
最新版ガイドラインの通年性鼻炎の治療とは?
「Q&Aでわかるアレルギー疾患」 2(5) : 421-422, 2006
- (8) 松根彰志
特集 小児科医が知りたい・聞きたい「子どもの耳・鼻・のど Q&A」
6. 副鼻腔炎 Q31 積極的な治療が必要な程度
小児科臨床 59(12) : 2647-2650, 2006
- (9) 長竹貴広, 福山 聡, 清野 宏
マウスにおける NALT 単核球分離法. 日本免疫学会会報 (JSI Newsletter) 14(2) : 21, 2006
- (10) 高村 薫, 福山 聡, 清野 宏
気道の免疫. 小児内科 39(1) : 17-25, 2007
- (11) 福岩達哉
「日常診療に潜む GERD について」 GERD と耳鼻咽喉科疾患. Pharma Medica, 25(2) :
78-80, 2007

(12) 黒野祐一

気管食道科医のための上気道感染症の診方

日本気管食道科学会会報 57(2)別刷：186-190, 2006

(13) 黒野祐一

特集 鼻科診療における論点

「アレルギー性鼻炎に合併する副鼻腔炎の病態をどう考えるか？」

－感染の立場から－

JOHNS 22(10)：1451-1543, 2006

(14) 黒野祐一

「副鼻腔感染とアレルギー」

呼吸 25(10)別刷：927-932, 2006

(15) 出口浩二, 相良ゆかり, 福岩達哉, 黒野祐一

特集 脈管原生腫瘍をどう扱うか その他の脈管原生腫瘍

「若年性鼻咽腔血管繊維腫の放射線定位照射」

JOHNS 22(11)：1611-1614, 2006

(16) Fukuyama, S., Nagatake, T., Kim, D.Y., Takamura, K., Park, E.J, Kaisho, T., Tanaka, N.,

Kurono, Y. and Kiyono, H

Cutting Edge: uniqueness of lymphoid chemokine requirement for the initiation and maturation of NALT organogenesis

J. Immunol. 177(7) 4276-4280, 2006

4. その他

松根彰志

紙上診察室 副鼻腔炎「アレルギー合併の検査を」南日本新聞 平成18年12月8日

5. 国内学会・研究会発表

(1) 特別講演

九州大学医学部臨床講義 平成18年4月5日 (福岡市)

「上気道の免疫・アレルギー疾患」

黒野祐一

第2回京都気道疾患研究会 平成18年6月10日 (京都市)

「鼻副鼻腔炎と下気道疾患」

松根彰志

ERS & ISIAN 2006

The 21st Congress of the European Rhinologic Society

The 25th International Symposium on Infection and allergy of the Nose

Jun 11-15,2006 (Tampere・Finland)

「The Impact of Nasal Allergy on Chronic Sinusitis—Clinical and Basic Studies」

Y. Kurono, J. Ohori, S. Matsune

「Upper and Lower Respiratory Inflammation in Adults and Children」

S.Matsune

熊本大学医学部臨床講義 平成18年6月21日 (熊本市)

「上気道疾患と粘膜免疫」

黒野祐一

千葉アレルギー・ロイコトリエン研究会2006 平成18年6月30日 (千葉市)

「鼻アレルギー診療ガイドラインにおけるロイコトリエン拮抗薬の位置づけ」

黒野祐一

大分大学医学部講義 平成18年6月26日 (大分市)

「口腔・咽頭癌」

黒野祐一

第6回山口県市感染症研究会 平成18年7月6日 (山口市)

「最近の上気道感染症と治療」

松根彰志

第21回九州連合地方部会教育講演 平成18年7月15-16日 (大分市)

「NALTを中心とした上気道粘膜免疫機構」

福山 聡

社保・国保審査委員合同研修会 ～アレルギー疾患の治療について～

平成18年10月18日 (金沢市)

「アレルギー性鼻炎・花粉症の治療における抗ロイコトリエン薬の位置づけ」

黒野祐一

第34回周南耳鼻科医会 平成18年11月11日 (徳山市)

「小児期の副鼻腔炎の特徴について」

松根彰志

九大耳鼻科OBセミナー 平成18年11月17日 (福岡市)

「アレルギー性鼻炎治療の現状と今後の展望」

黒野祐一

第43回日本小児アレルギー学会教育セミナー4 平成18年11月25日 (東京)

「アレルギー性鼻炎と小児気管支喘息の接点」

黒野祐一

日耳鼻愛媛県地方部会学術講演会 平成18年11月30日 (松山市)

「アレルギー性鼻炎・花粉症の診療における留意点」

－ガイドラインの視点から－

黒野祐一

第54回日本化学療法学会西日本支部総会 イブニングセミナー

平成18年12月2日 (福岡市)

「急性上気道感染症の診療における留意点」

黒野祐一

花粉症治療 2007 平成19年1月18日 (名古屋市)

「花粉症の診療における留意点」

黒野祐一

八女筑後医師会学術講演会 平成19年1月19日 (八女市)

「アレルギー性鼻炎・花粉症の診療における留意点」－ガイドラインの視点から－

黒野祐一

東京ロイコトリエン研究会 2007 平成19年1月20日 (東京)

「アレルギー性鼻炎・花粉症治療における抗ロイコトリエン薬の位置づけ」

黒野祐一

日田市医師会学術講演会 平成19年1月26日 (日田市)

「アレルギー性鼻炎・花粉症の診療における留意点」

－ガイドラインの視点から－

黒野祐一

日本耳鼻咽喉科学会山梨県地方部会研修会 平成19年2月3日 (甲府市)

「アレルギー性鼻炎・花粉症の診療における留意点」

黒野祐一

アレグラ小児適応追加記念講演会 平成19年2月7日 (前橋市)

「アレルギー性鼻炎の診断・治療における留意点」

黒野祐一

新潟アレルギー性鼻炎フォーラム 2007 平成19年2月8日 (新潟市)

「アレルギー性鼻炎・花粉症の診療における留意点」

－ガイドラインの視点から－

黒野祐一

第1回下関アレルギーを語る会 平成19年2月9日 (下関市)

「小児アレルギー性鼻炎の診療における留意点」

黒野祐一

アレグラ30mg発売記念講演会 平成19年2月10日 (札幌市)

「アレルギー性鼻炎の診断・治療における留意点」

黒野祐一

第18回宮崎感染症研究会 平成19年2月14日 (宮崎市)

「急性上気道感染症の診療における留意点」

黒野祐一

香川上気道・下気道学術講演会 平成19年2月16日 (高松市)

「アレルギー性鼻炎の診断と治療」

松根彰志

福岡地区耳鼻咽喉科専門医会学術講演会 平成19年2月17日 (福岡市)

「アレルギー性鼻炎の診療における留意点」

黒野祐一

第13回御茶ノ水耳鼻咽喉・頭頸部科治療研究会 平成19年2月22日 (東京)

「上気道粘膜免疫による細菌感染症とアレルギーの制御」

黒野祐一

鹿島・藤津医師会学術講演会 平成19年2月22日 (鹿島市)

「アレルギーと鼻副鼻腔炎の治療」

松根彰志

多摩アレルギー性鼻炎フォーラム2007 平成19年2月28日 (東京)

「アレルギー性鼻炎・花粉症の診療における留意点」

－ガイドラインの視点から－

黒野祐一

栃木県アレルギー性鼻炎フォーラム2007 平成19年3月1日 (宇都宮市)

「アレルギー性鼻炎・花粉症の診療における留意点」

－ガイドラインの視点から－

黒野祐一

第64回播州地区耳鼻科医会 勉強会 平成19年 3月 4日 (姫路市)

「アレルギー性鼻炎・花粉症の診療における留意点」

黒野祐一

座談会「日本と欧米諸国における, アレルギー性鼻炎の診断と治療

－ガイドラインを中心に－ 平成19年 3月31日 (甲府市)

黒野祐一, 松根彰志

(2) シンポジウム

第46回日本呼吸器学会学術講演会 平成18年 6月 2日 (東京)

喘息治療戦略の将来 ～ GL の観点から～

国際ガイドライン ARIA から

黒野祐一

第18回鹿児島消化管治療研究会 平成18年 5月26日 (鹿児島市)

「GERD と耳鼻咽喉科疾患」

福岩達哉, 黒野祐一

ERS & ISIAN 2006

The 21st Congress of the European Rhinologic Society

The 25st International Symposium on Infection and allergy of the Nose

Jun 11-15,2006 (Tampere・Finland)

「The role of Cytokines in Eosinophils Infiltration into Nasal Polyps」

Y.Kurono, MD

「The Characteristics of Nasal Mucosal Immunity and Its Application for Mucosal Vaccine」

S.Matsune, MD

第45回日本鼻科学会総会ならびに学術講演会 平成18年 9月22日～23日 (四日市市)

小児副鼻腔炎の問題点と治療戦略

「小児と成人の副鼻腔炎の違い -疫学と病態の観点から-

松根彰志

臨床セミナー

第107回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会 平成18年5月11日～13日（東京）
 画像診断と手術解剖 ―上気道感染症の画像診断と手術適応―
 黒野祐一

教育セミナー

第56回日本アレルギー学会秋季学術大会 平成18年11月2日～4日（東京）
 「アレルギー性鼻炎とその関連疾患に対する対応」
 黒野祐一

(3) 一 般

第18回日本喉頭科学会総会・学術講演会 平成18年4月13日～14日（熊本）
 「喉頭癌の術前検査としてのPETの有用性について」
 川島雅樹, 西元謙吾, 黒野祐一
 「喉頭軟骨肉腫の1例」
 早水佳子

第107回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会 平成18年5月11日～13日（東京）
 「アレルギー性鼻炎上皮細胞における血管内皮細胞増殖因子（VEGF）産生とその受容体」
 松根彰志, 大堀純一郎, 吉福孝介, 積山幸祐, 福岩達哉, 黒野祐一
 「スギ花粉少数飛散地域における初期療法の有用性」
 宮之原郁代, 松根彰志, 大堀純一郎, 相良ゆかり, 西元謙吾, 黒野祐一
 「記憶型樹状細胞を介した新しい経鼻粘膜アジュバンドの研究」
 福岩達哉, 藤橋浩太郎, Kreig Arthur M, McGhee Jerry R, 黒野祐一

第18回日本アレルギー学会春季臨床大会 平成18年5月30日～6月1日（東京）
 「スギ花粉症患者における患者満足度の検討」
 宮之原郁代, 松根彰志, 田中紀充, 相良ゆかり, 西元謙吾, 黒野祐一
 「プラシチンカストの鼻茸好酸球浸潤抑制効果に関する臨床的検討」
 吉福孝介, 松根彰志, 黒野祐一

第30回日本頭頸部癌学会 第27回頭頸部手術手技研究会

平成18年6月14日～6月16日 (大阪)

「TS-1が著効した上顎腺癌の一例」

福岩達哉, 西元謙吾, 林 多聞, 黒野祐一

「副咽頭間隙腫瘍の術前診断における問題点」

相良ゆかり, 西元謙吾, 林 多聞, 黒野祐一

第68回耳鼻咽喉科臨床学会学術講演会 平成18年6月23日～24日 (金沢)

「当科における突発性難聴症例の検討」

下麥哲也, 相良ゆかり, 西元謙吾, 黒野祐一

「最近の鼻出血における問題点—抗血小板薬との関連性について—」

原田みずえ, 相良ゆかり, 下麥哲也, 黒野祐一

第1回日本小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会 平成18年6月30日～7月1日(奈良)

「上顎に発生した小児 Primitive Neuroectodermal Tumor」

川島雅樹, 吉福孝介, 相良ゆかり, 黒野祐一

第5回鹿児島めまい研究会 平成18年7月6日

「めまい症状が先行した原田病の一例」

宮之原郁代, 相良ゆかり, 原田みずえ, 西元謙吾, 福岩達哉, 黒野祐一

第21回九州連合地方部会学術講演会 平成18年7月15日～7月16日 (大分)

「突発性難聴の治療に関する検討」

下麥哲也, 相良ゆかり, 宮之原郁代, 西元謙吾, 黒野祐一

「当科における頭頸部神経内分泌癌症例の検討」

谷本洋一郎, 花牟礼 豊, 小松原幸子, 笠野藤彦

「頬部に発生した悪性線維性組織球腫の一例」

永野広海, 出口浩二

Airways Mucosal Immunology Study-Group (AMIS) 平成18年7月8日～9日 (東京)

「A combination of Flt3 Ligand cDNA and CpG ODN as nasal adjuvants elicit memory NALT dendritic cells for prolonged mucosal immunity」

Tatsuya Fukuiwa

「Chronological requirement of cytokines and chemokines for NALT-genesis」

S. Fukuyama

「Mucosal immunity by nasal B1 cells that migration is independent of CXCR5/CXCL13 interaction」

N. Tanaka

「Nasal Fibroblasts produce chemokines and Adhesion Molecules for Eosinophils in Patients with Chronic Rhinosinosis」

J. Ohori

第13回マクロライド新作用研究会 平成18年7月14日～15日 (東京)

「鼻茸と下鼻甲介粘膜由来の培養線維芽細胞における血管内皮細胞増殖因子産生の違いとマクロライドによる抑制効果について」

松根彰志, 原田みずえ, 田中紀充, 大堀純一郎, 黒野祐一

AR Forum 2006 平成18年8月19日 (東京)

-Pathology of Airway Allergy and Vascular Endothelial Cells-

「Vascular endothelial cells and eosinophil infiltration in allergic rhinitis」

Shoji Matsune, MD, PhD

第19回日本口腔・咽頭科学会総会 平成18年9月7日～8日 (東京)

「掌蹠嚢胞症におけるケラチン特異的抗体活性とその臨床的意義」

相良ゆかり, 田中紀充, 宮下圭一, 黒野祐一

「口腔咽頭領域に認めた海綿状血管腫の2例」

川島雅樹, 積山幸祐, 林 多聞, 黒野祐一

第45回日本鼻科学会総会ならびに学術講演会 平成18年9月22日～23日 (四日市市)

「プラナルカストの鼻茸への好酸球浸潤の抑制効果」

吉福孝介, 松根彰志, 大堀純一郎, 黒野祐一

「慢性副鼻腔炎の鼻茸及び下鼻甲介粘膜由来線維芽細胞における VEGF と TGF- β 産生の比較」

原田みずえ, 松根彰志, 田中紀充, 大堀純一郎, 吉福孝介, 黒野祐一

第58回日本気管食道科学会総会ならびに学術講演会 平成18年10月5日～6日（札幌）
—ランチョンセミナー—

「気道アレルギーの診療における留意点」

—One airway, One disease の観点から—

黒野祐一

「嚥下障害を主訴とした Forestier 病の1症例」

相良ゆかり, 西元謙吾, 福岩達哉, 黒野祐一

「喉頭部分切除術の予後と問題点」

林 多聞, 福岩達哉, 黒野祐一

第16回日本耳科学会総会ならびに学術講演会 H18年10月19日～21日（青森）

「めまい症状が先行した原田病の一例」

宮之原郁代, 相良ゆかり, 西元謙吾, 福岩達哉, 黒野祐一

「外耳腫瘍に対する治療法の検討」

相良ゆかり, 西元謙吾, 林 多聞, 黒野祐一

第56回日本アレルギー学会秋季学術大会 平成18年11月2日～4日（東京）

「アレルギー性鼻炎患者の下鼻甲介粘膜上皮における VEGF と TGF- β の発現について」

大堀純一郎, 松根彰志, 牧瀬高穂, 吉福孝介, 黒野祐一

「アレルギー性鼻炎マウスモデルを用いた Phosphorylcholine 前投与のアレルギー反応抑制効果の検討」

田中紀充, 福山 聡, 宮下圭一, 黒野祐一

第8回上気道アレルギー疾患を考える会 平成18年11月16日

「郵送法を用いた2006年スギ花粉飛散ピーク期 QOL 調査の検討」

宮之原郁代（鹿児島大学大学院聴覚頭頸部疾患学）

「鼻粘膜における血管透過性亢進作用 VEGF vs ヒスタミン」

松根彰志（鹿児島大学大学院聴覚頭頸部疾患学）

第36回日本免疫学会総会・学術集会 平成18年12月11日～13日（大阪）

「A Combination of Fts3 Ligand cDNA and CpG ODN as Nasal Adjuvants Elicit NALT Dendritic Cell Activation for Prolonged Mucosal Immunity」

Tatsuya Fukuiwa, Ryoki Kobayashi, Shinichi Sekine, Hideaki Suzuki, Kosuke Kataoka, Bibi Rahima, Yuichi Kurono, Prosper N. Boyaka, Arthur M.

第17回日本頭頸部外科学会総会・学術講演会 平成19年2月1日～2日 (島根)

「即時膿瘍扁桃摘術の出血に関する検討」

西元謙吾, 早水佳子, 黒野祐一

「頭蓋顔面多発骨折の治療経験」

大堀純一郎, 林 多聞, 黒野祐一

第38回睡眠呼吸障害研究会 平成19年2月17日 (東京)

「小児 OSAS 症例に対する手術治療と術後評価」

田中紀充, 松根彰志, 出口浩二, 宮下圭一, 黒野祐一

第19回気道病態シンポジウム 平成19年2月24日 (東京)

「Phosphorylcholine 経鼻免役による鼻腔内細菌クリアランスの変化」

田中紀充, 福山 聡, 川島雅樹, 福岩達哉, 黒野祐一

「アレルギー性鼻炎患者における下鼻甲介粘膜上皮からの VEGF, TGF- β の発現とその意義」

大堀純一郎, 松根彰志, 牧瀬高穂, 黒野祐一

第19回日本喉頭科学会学術講演会 平成19年3月8日～9日 (神戸)

「喉頭肉芽腫手術における X P S ドリルの応用とその有効性の評価」

福岩達哉, 川島雅樹, 林 多聞, 黒野祐一

「喉頭に発生した Basaloid Squamous Cell Carcinoma の一例」

牧瀬高穂, 福岩達哉, 黒野祐一

第25回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会 平成19年3月29日～31日 (甲府)

「鼻粘膜血管透過性亢進作用に関する V E G F とヒスタミンの実験動物を用いた比較検討」

松根彰志, 大堀純一郎, 黒野祐一

「マウス鼻粘膜 B₁細胞の特異性」

田中紀充, 福山 聡, 長竹貴広, 黒野祐一, 清野 宏

「アレルギー性鼻炎マウスモデルにおける Phosphorylcholine のアレルギー抑制作用についての検討」

宮下圭一, 福山 聡, 田中紀充, 福岩達哉, 黒野祐一

6. 国際学会発表

THE 11th KOREA-JAPAN

Joint Meeting of Otorhinolaryngology-Head and Neck Surgery April 6-8, 2006 (BUSAN)

[MUCOSAL ADJUVANTS TO INHIBIT IgE PRODUCTION AS PRESERVING IGE IMMUNE RESPONSES]

Yuichi Kurono, Norimitsu Tanaka, Keiichi Miyashita

[NASAL FIBROBLASTS PRODUCE CHEMOKINES AND ADHESION MOLECULES FOR EOSINOPHILS IN PATIENTS WITH CHRONIC RHINOSINUSITIS]

Kousuke Yoshifuku, Junichiro Ohori, Shoji Matsune, Yuichi Kurono

IV INTERNATIONAL CONSENSUS CONFERENCE ON NASAL POLYPOSIS

Under the auspices of EUFOS, ERS & IRS May 5-7, 2006 (Moscow, Russia)

[The role of cytokines in eosinophils infiltration into nasal polyps]

Shoji Matsune

ERS & ISIAN 2006

The 21st Congress of the European Rhinologic Society

The 25st International Symposium on Infection and allergy of the Nose

Jun 11-15, 2006 (Tampere • Finland)

[Vascular Endothelial Growth Factor Produced in Mucosal Glands of Allergic Rhinitis]

S. Matsune, D. Sun, J. Ohori, Y. Kurono

[Nasal Fibroblasts Produce Chemokines and Adhesion Molecules for Eosinophils in Patients with Chronic Rhinosinusitis]

J. Ohori, K. Yoshifuku, S. Matsune, Y. Kurono

[Application of Mucosal Vaccine to Inhibit IgE Production as Preserving IgA Immune Responses]

Y. Kurono, N. Tanaka, K. Miyashita, T. Fukuiwa and K. Fujihashi

2006 JOINT MEETING OF EIGHT DEPARTMENTS OF OTOLARYNGOLOGY

November 25-26, 2006 (Taipei, Taiwan)

[Keratin-specific antibody forming cells in peripheral blood might predict the prognosis of patients with palmoplantar pustulosis

~for establishment of a prognosticator of therapeutic effects]

Y. Sagara, N. Tanaka, K. Miyashita, S. Matsune, Y. Kurono

「Clinical strategy for unknown-origin carcinomas using PET」

T.Hayashi, S.Matsune, T.Fukuiwa, Y.Kurono

The 11th Asian Research Symposium in Rhinology

November 30–December 2, 2006 (Seoul, Korea)

「Clinical aspects of eosinophilic sinusitis」

Y.Kurono, K.Yoshifuku, J.Ohori, S.Matsune

「A combination of fits3 ligand CDNA and CPG ODN as nasal adjuvants elicit long last-
ing immunity mediated by both TH1-and TH2-type cytokines and nalt plasmacytoid
dendritic cells」

Tatsuya Fukuiwa, Kohtaro Fujihashi, Arthur M. Krieg, Jerry R. McGhee and Yuichi
Kurono

「Intranasal immunization with phosphorylcholine induced protective immune responses
against; *S.pneumoniae* and nontypeable *H.influenzae*」

N.Tanaka, S.Fukuyama, T.Fukuiwa, M.Kawabata, Y.Kurono

「Increased expression of eotaxin fibroblasts of eosinophilic nasal polyps 」

T.Makise, K.Yoshifuku, S.Matsune, J.Ohori, Y.Sagara, T.Fukuiwa, Y.Kurono

7. 学位論文要旨

医研 第640号

**Intranasal immunization with phosphorylcholine induces antigen specific mucosal and sys-
temic immune responses in mice.**

(マウスにおける phosphorylcholine 経鼻投与に対する粘膜および全身免疫応答)

田 中 紀 充

【はじめに】

中耳炎, 上気道炎において, 近年, 耐性菌の出現が問題となり, 発症予防のためのワクチン, 特に粘膜ワクチンの開発が注目されている。既に肺炎球菌に対するワクチンは実用化されているものもあるが, その効果は十分ではない。投与した血清型の菌種, 菌株には効果を示すが他の血清型の菌株には全く効果を示さない。したがって, ワクチン接種した菌を起炎菌とする中耳炎は減少しても急性中耳炎の減少にはつながっていない。

また、小児、高齢者といった免疫反応の弱い層への効果が期待できない点も問題点である。今後、このような問題点を克服できる新たな粘膜ワクチンの開発が期待されている。

phosphorylcholine（以下、PC とする）は、1967年、グラム陽性菌である肺炎球菌の細胞壁を構成するペプチドグリカン、および、リボタイコ酸の構成成分、特に免疫学的優勢抗原決定基であると認識された。その後、グラム陽性菌の他の細菌、グラム陰性菌にも PC が表出していることがわかってきた。最近の研究では、肺炎球菌の上皮への浸潤には、細胞表面の PC と PAF レセプターとの結合がかかわっているといわれ、PC の発現がその細菌の病原性に関与することが示唆されている。また、肺炎球菌、インフルエンザ菌といった病原菌に対する防御に PC に対する自然免疫が重要な役割を担っているともいわれている。

以上の知見から、PC 特異的な免疫が誘導されれば、より広域の細菌感染に効果のある粘膜ワクチン開発の可能性につながるのではないかと考えられる。今回、我々は多種、多様な細菌種の表面に表現し、免疫学的活性部位とされる PC を抗原として用いて、マウスに経鼻投与を行い、特異的免疫応答の誘導を観察した。

【材料および方法】

生後 6 週の BALB/c マウスに PC-KLH $50\mu\text{g}$ を粘膜アジュバントとしてコレラトキシン (CT, $1\mu\text{g}$) を加えて経鼻投与した。免疫は週 1 回 3 週にわたって行い、最後の免疫から 7 日後にサンプル（血清、唾液、鼻腔洗浄液、鼻粘膜、脾臓）を採取した。

①ELISA 法にて、唾液、鼻腔洗浄液、血清中の PC 特異的抗体価を測定した。②ELISPOT 法にて、脾臓、鼻腔粘膜中の PC 特異的抗体産生細胞数を測定した。③また、誘導された唾液、血清中の抗体が PC 特異的であることを、PC による阻害実験 (ELISA 法) にて観察した。④免疫後の脾臓 CD4⁺T 細胞を *in vitro* にて PC で刺激し、その上清中のサイトカイン (IL-4, IFN- γ) を ELISA 法にて調べた。⑤患者から採取した複数の肺炎球菌、インフルエンザ菌と誘導された唾液中の PC 特異的抗体の反応を ELISA 法にて観察した。また、TEPC15 (PC 特異的 IgA) に対する反応との相関を検討した。⑥PC にて免疫したマウスを用いて、鼻腔内に肺炎球菌、インフルエンザ菌の生菌をチャレンジして、12時間後の鼻腔洗浄液中、鼻粘膜中の細菌数を観察した。

【結 果】

①、②PC-KLH の経鼻免疫によって、唾液、鼻腔洗浄液中の PC 特異的 IgA の抗体価が上昇し、鼻粘膜中の PC 特異的 IgA 産生細胞数の有意な増加が観察された。また、血清中の PC 特異的抗体 (IgM, IgG, IgA) の抗体価の上昇が観察され、脾臓の PC 特異的抗体産生細胞数の増加が観察された。③誘導された唾液中の IgA は、PC-BSA でコーティングされたプレートへの結合をハプテン PC により阻害された。また、血清中の IgM も同様にハプテン PC により阻害されたが、IgG は阻害されなかった。④免疫後の脾臓

CD4⁺T細胞をPCで刺激し、その上清中のIL-4はコントロール群と比較して有意に上昇した。また、IFN- γ も有意ではなかったが上昇した。⑤PC免疫により誘導された唾液中のIgAは、肺炎球菌、インフルエンザ菌の様々な菌株に対して反応し、その反応は、細菌のTEPC15との反応に有意に相関した。⑥PCにて免疫されたマウスにおいて、肺炎球菌、インフルエンザ菌の感染12時間後、鼻腔洗浄液中、鼻粘膜中細菌数が有意に減少していた。

【考察及び結語】

PC-KLH+CTの経鼻投与により、粘膜局所及び全身性にPC特異的免疫の誘導が観察された。PCによる阻害実験の結果から、PC-KLH経鼻投与により誘導された唾液IgA、および血清中IgMはPC特異的に反応することが確認された。血清中IgGは、PC特異的ではなく、ハプテンPCと蛋白の結合部に特異的である可能性が考えられた。

また、PC-KLH+CT経鼻免疫による免疫応答は、Th2型およびTh1型両方の反応を誘導していると推測され、Th2型は主に粘膜アジュバントに用いたCTによる反応と考えられた。Th2型を誘導することで、アナフィラキシーが危惧されるが、CT単独投与と比較して、PC-KLH+CT投与群においては血清中のIgEが抑制される結果を得ており、危険性は高いものではないと考えられた。

PC-KLH経鼻免疫により誘導されたマウス唾液IgAは、種々の肺炎球菌、インフルエンザ菌に反応を示し、PCの発現の強い菌により強く反応すると考えられた。したがって、浸潤能力の強い病原性の高い病原菌に対して、効果的に作用すると考えられた。さらに、PC-KLH経鼻免疫により、鼻腔内の細菌に対するクリアランスが上昇したことから、生体内において誘導された抗体が効果的に作用することが期待できる。

以上より、PCは、肺炎球菌、インフルエンザ菌といった起炎菌による上気道炎症を予防する、より広域に働く粘膜ワクチンとして有用であることが示唆された。

医研 第641号

TNF- α upregulates VCAM-1 and NF- κ B in fibroblasts from nasal polyps.

(鼻茸由来繊維芽細胞において TNF- α は VCAM-1発現と NF- κ B 活性化を亢進する)

大 堀 純一郎

【序論および目的】

鼻茸は我々耳鼻咽喉科医が日常診療にてよく目にする疾患である。慢性副鼻腔炎，アレルギー性鼻炎，好酸球増多性鼻炎において認められる鼻茸の組織中には，好酸球の浸潤を認める。また，好酸球増多性鼻炎における鼻茸ではその再発性が高いことも良く知られている。鼻茸の治療効果が悪い原因として好酸球が増悪因子として働いていると考えられており，好酸球の浸潤に着目することは，その病態の解明，治療戦略につながると思われる。

好酸球の局所浸潤には，好酸球と接着分子を介する血管内皮細胞との相互作用が必要とされ，好酸球上に VLA-4・LFA-1・MAC-1などが，一方，血管内皮細胞上に VCAM-1・ICAM-1などが発現し，双方が好酸球の選択的な病変部への浸潤に関与すると考えられている。とりわけ，VLA-4は，好中球には発現せず好酸球のみに発現しているため，VLA-4と VCAM-1を介した接着は，アレルギー性炎症における好酸球の選択的病変部への浸潤に関与すると考えられている。

肺由来線維芽細胞や関節線維芽細胞は TNF- α 刺激により，VCAM-1を産生することが知られている。一方で鼻茸の fibroblast から発現される VCAM-1については未だ報告がない。

そこで今回我々は，鼻アレルギー患者における鼻茸由来の線維芽細胞における，VCAM-1の発現について検討したので報告する。

【材料および方法】

1) 細胞

鼻茸線維芽細胞は，手術によって得られたヒト鼻茸から分離培養し，4世代目のヒト鼻茸培養線維芽細胞を用いた。

2) ELISA

TNF- α 刺激24時間後の鼻茸線維芽細胞の培養上清中の VCAM-1濃度を ELISA 法にて測定した。

3) RT-PCR

TNF- α 刺激 6 時間後の鼻茸線維芽細胞より mRNA を抽出し，RT-PCR 法を用いて VCAM-1 mRNA を測定した。

4) flow cytometry

TNF- α 刺激24時間後の鼻茸由来線維芽細胞膜表面上の VCAM-1を flow cytometry にて測定した。

5) EMSA

TNF- α 刺激30分後の鼻茸線維芽細胞から核タンパクを抽出し、EMSA 法にて NF- κ B 活性化を測定した。

6) proteasome inhibitor による NF- κ B に対する効果

proteasome inhibitor にて 4 時間前処理した鼻茸線維芽細胞を TNF- α にて刺激し、鼻茸線維芽細胞から発現する VCAM-1を ELISA 法 (上記 2), RT-PCR 法 (上記 3) を用いて測定した。また、NF- κ B の活性化を EMSA 法 (上記 5) にて測定した。

【結 果】1) TNF- α 刺激による VCAM-1発現

ELISA 法にて培養上清中の sVCAM-1を測定したところ、無刺激の状態にても sVCAM-1の発現が認められ、TNF- α (0.1ng/ml) 刺激より統計学的有意に sVCAM-1の発現が亢進した。また TNF- α (10ng/ml) の濃度にて sVCAM-1の発現はプラトーに達した。RT-PCR 法により、mRNA レベルにても同様の結果であった。

2) 鼻茸線維芽細胞膜表面上の VCAM-1

フローサイトメトリー法による膜表面上の VCAM-1測定にて、VCAM-1は無刺激の状態でも発現しており、TNF- α 刺激によりその発現は統計学的有意に亢進した。

3) TNF- α 刺激による NF- κ B 活性化

EMSA 法による NF- κ B 活性化の検討にて、TNF- α 刺激は NF- κ B 活性化を亢進させた。

4) proteasome inhibitor による VCAM-1発現に対する効果

TNF- α により活性化された NF- κ B は、MG-132にて濃度依存性にその活性化が抑制された。また MG-132の前処理により VCAM-1発現もタンパクレベル、mRNA レベルにて抑制された。

【結論及び考察】

本研究により、鼻茸線維芽細胞は恒常的 VCAM-1を発現しているが、TNF- α の刺激で有意にその発現が亢進することが示された。さらに、線維芽細胞における VCAM-1の産生には、NF- κ B の活性化が関与していることが明らかとなった。これらの知見は、難治性であり再発を繰り返す好酸球浸潤型の鼻茸に対して、NF- κ B を標的とした治療の有用性を示唆すると考えられる。

1. 医局人事（平成19年6月現在）

教 授	黒野祐一
准 教 授	松根彰志
講 師	西元謙吾，福岩達哉
助 教	相良ゆかり，林 多聞，田中紀充
医 員	大堀純一郎，早水佳子，宮下圭一，川島雅樹，牧瀬高穂
大学院生	早水佳子，原田みずえ，宮下圭一，川島雅樹，牧瀬高穂
研修登録医	宮之原郁代

医 局 長	福岩達哉
外来医長	西元謙吾
病棟医長	林 多聞

関連病院（平成19年6月現在）

国立療養所星塚敬愛園	宮之原郁代
県立大島病院	吉福孝介，永野広海（自治医科大学）
鹿屋医療センター	平瀬博之，高木 実
済生会川内病院	上村隆雄
鹿児島生協病院	積山幸祐
藤元早鈴病院	森園健介（部外研究生）
あまたつクリニック	原田みずえ（大学院生）
鹿児島市立病院	下麥哲也（部外研究生）
鹿児島医療センター	谷本洋一郎（部外研究生）

2. 学会報告

第18回日本喉頭科学会総会・学術講演会

早水佳子

本学会は、晴れ渡る暖かな陽気の熊本の地にて、平成18年4月13日～14日開催されました。

天辰病院での一人勤務であった私は、残念ながら、4月14日のみの参加となりました。

私のグループは、特殊な喉頭腫瘍という演題が集まっており、また、4演題中3つが、女性の発表であり、何かしら心強いものを感じました。

静かな発表になると思いきや、座長は勿論のこと、会場からの質問もかなり多く、熱く、賑やかな場となりました。

第18回アレルギー学会春季臨床大会

吉福孝介

第18回アレルギー学会春季臨床大会は平成18年5月30日～6月1日まで東京で開催されました。黒野教授、松根助教授、宮之原先生、そして吉福が参加させて頂いた。

東京まで飛行機で行き、電車でのりつぎ京王プラザホテルにいきました。自分は3日目、好酸球の群で、ブランチカストによる鼻茸好酸球に関する検討についての発表でありました。教授は同時間に発表をされていたために、おられませんでした。松根助教授が自分の発表の追加等をしてくださり、感謝しました。日頃より松根先生には、非常にお世話になっておりますが、この時ほど感銘をうけたことはありません。紙上ではありますが、どうも有難うございました。学会自体はアレルギー特有の疾患についてであり、とても勉強になりました。

第68回耳鼻咽喉科臨床学会

下 麥 哲 也

平成18年度の耳鼻咽喉科臨床学会は、北陸地方の中心都市である金沢市で開催されました。当教室からは、私と原田先生が発表いたしました。私の演題が突発性難聴についてで、原田先生の演題は鼻出血についてでした。金沢市へは、大阪まで飛行機で飛び、大阪からは鉄道で金沢市に入りました。全行程で4～5時間かかったように覚えていますが、学会期間中は晴天に恵まれ、傘が不要であったのも何よりですが、見慣れぬ北陸の町並みを歩いて、見て回ることが出来たのが自分にとっては楽しい思い出になりました。原田先生は、名勝「兼六園」を探訪されたようです。学会発表は、私も原田先生もポスター発表でした。自分のポスターを貼ってみると、なんとなく嬉しいもので、何度も何度もポスターの前を往復してしまいました。しかし、発表、討論が始まると、さすがに緊張してしまい、そんな余裕はどこかに吹っ飛んでしまいました。何とか質問に返答し終わったあとは、いつもどおり汗びしょりでした。他演題についても臨床に即した内容の演題が多く、自分にとっては大変興味深い学会となりました。

第30回日本頭頸部癌学会、第27回手術手技研究会

相 良 ゆかり

平成18年6月14日、15日、16日の3日間にわたり、大阪（大阪国際会議場）にて第30回日本頭頸部癌学会、第27回手術手技研究会が開催されました。今回は大阪府立成人病センター耳鼻咽喉科の吉野邦俊先生が主催された会でした。鹿児島大学から黒野教授、福岩先生、私相良の3人が参加しました。頭頸部癌学会というと、手術手技研究会も一緒に行われており、surgeonの会という印象がつよく自分とは縁遠い学会という印象がありました。しかし、初日のシンポジウムより「形成外科に学ぶ頭頸部領域の基本手技～切除側・再建側、徹底討論～」など日常の診療のなかで常にぶつかっている問題をわかりやすく提示していただき、また活発な討論で見ている私たちも一緒に考えやすい討論会でした。そのほかのシンポジウムでも「喉頭温存手術の現状と将来展望」や「下咽頭癌と喉頭癌の治療を今改めて考える」など身近な治療の問題点をpick upしてディスカッションしていただき大変勉強になる学会でありました。

第1回小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会

川 畠 雅 樹

2006年6月30日，7月1日の2日間，奈良市にて第1回小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会が開催され，当医局より黒野教授と私の2名で参加いたしました。会場は奈良公園内の奈良県新公会堂で，付近には鹿がたわむれ，東大寺，興福寺，春日大社もあり絶好のロケーションでした。『古の都奈良で小児耳鼻咽喉科学の未来を語る』のキャッチフレーズのもと，耳鼻科医，小児科医の間で熱心な議論が交わされておりました。小児科医と耳鼻科医の間での討論は他の耳鼻咽喉科の学会ではあまりない機会であり，とても興味深く拝聴しました。私は，「上顎に発生した小児 Primitive Neuroectodermal Tumor の1例」という演題でポスター発表をさせて頂きました。夜には，奈良時代の歴史に思いを馳せながら，七夕をまえに笹の葉がたなびく小路を散策し，非常に素敵な時間を過ごすことができました。

第21回九州連合地方部会学術講演会

永 野 広 海

第21回九州連合地方部会学術講演会は，平成18年7月に大分市において開催されました。当教室からは，福山先生が教育講演を，下麦先生，谷本先生と私の3人は発表をしました。わたしは，「頬部に発生した悪性線維性組織球腫の一例」をポスター発表させて頂きました。久しぶりの発表でしたが，あまり厳しい質問もなく，なんとかこなせました。

また教室対抗野球大会は，残念ながら(?)初戦で佐賀大学に敗れたため，温泉と関アジ関サバ会食ツアーとなりました。やはり有名なだけあり美味でした。いい思い出になりました。

第19回日本口腔・咽頭科学会総会

川 畠 雅 樹

2006年9月7, 8日の2日間にわたって第19回日本口腔・咽頭科学会総会が東京都の京王プラザホテルで開催されました。当医局からは黒野教授, 相良先生, 田中先生とともに参加いたしました。相良先生は「掌蹠膿疱症におけるケラチン特異的抗体活性とその臨床的意義」, 田中先生は「小児 OSAS 症例に対する手術治療適応と術後評価」, 私は「口腔咽頭領域に認めた海綿状血管腫の2例」を発表いたしました。私の口演は, 学会の最後の発表で, 最後の最後まで緊張したままの学会でした。シンポジウムでは「診療所における口腔咽頭疾患への対応」「嚥下障害治療の限界と問題点」など興味深い内容でした。扁桃, 咽頭, 嚥下, いびき・SAS, 唾液腺病変など幅広い領域について学ぶ良い機会となりました。

第45回日本鼻科学会総会

原 田 みずえ

H18年9月21~23日, 四日市で開かれた第45回日本鼻科学会総会に, 黒野教授, 松根助教授, 吉福先生, 私の4人で参加させていただきました。このような大きな学会への参加は初めてでありました。

私の発表は, 「慢性副鼻腔炎の鼻茸及び下甲介粘膜由来線維芽細胞の VEGF 及び TGF β の産生の比較」というタイトルで, 今行っている実験をもとにしたものでしたが, この分野はまだまだ知らないことが多かったので, この分野に詳しい先生方からどんな質問がくるだろうか, ちゃんと答えられるだろうか, かなり緊張しました。案の定, 大御所である野中先生より質問があり, 知識の無さから反対の答えをしてしまい, 壇上で顔から火が出るくらい恥ずかしい思いをしましたが, 松根助教授が助けてくださったおかげで, 何とか乗り切ることができました。

総会中, 大変面白かったのは, cadaver を用いた ESS のライブ中継があり, 鼻副鼻腔の解剖が良くわかり, 勉強になりました。

夜は松阪牛を堪能したいところでしたが, 残念ながらありつけませんでした...

第16回日本耳科学会総会・学術講演会

相 良 ゆかり

平成18年10月19日、20日、21日の3日間にわたり青森にて第16回耳科学会総会・学術講演会が開催されました。当教室からは、黒野教授、宮之原先生、相良の3人が参加しました。今回、学会の目玉は教育講演で山本中耳サーージセンターの山本悦生先生による鼓室形成術ライブサージャリーでした。1時間30分と限られた時間の中で、流れるような手捌きで細かい操作をされていました。いとも簡単に手術をされるので、かえって困難な点が把握しづらい程で、とても手技を盗み出すにも至りませんでした。私は、「外耳腫瘍における治療法の検討」という演題で発表させていただきましたが、何点かのご指摘受け、しどろもどろになってしまい、大変申し訳なく思いました。

また、この時期の青森は素晴らしい紅葉で、観光客の人たちも多く、八甲田山の紅葉が見に行けなかったのがとても残念でした。

第58回日本気管食道科学会総会に参加して

林 多 聞

2006年10月5日と6日の2日間札幌で開催されました第58回日本気管食道科学会総会には、黒野教授、相良先生と私の3人が参加しました。北海道は10月初旬でもやはり肌寒く感じました。相良先生の演題は嚥下障害を主訴とした Forestier 病の1例、私は喉頭部分切除術の予後と問題点という演題で臨みました。私的には以前からPETについて頭頸部癌の検討を行うことが多かったため、教育講演で塚本江利子先生による「気管食道領域におけるPET-CTの役割」を興味深く拝聴し、新しい知見を得ました。以前より頭頸部癌の治療成績を大きく向上させるためには、今後はいかに早期発見するかということが命題と考えていましたが、シンポジウムの「気管食道領域における内視鏡の進歩」では、「超」接近撮影法による電子内視鏡を用いた喉頭観察、中・下咽頭表在癌の内視鏡診断などについてのシンポジストのお話を聞き、診療支援器機の進歩により新たな可能性があると感じました。音声外科も個人的に興味深い分野であり、シンポジウム「難治性喉頭疾患の手術 私の対処法」で声帯溝症や痙攣性発声障害についての講演は、簡単に応用できるわけではありませんが、スペシャリストの治療に触れる貴重な機会でありました。さて当然ながら海の幸もおいしく、蟹や雲丹も堪能してまいりました。残念だったのはあまりにも大量にタラバガニが出てくるため、当初食べたかった新鮮な一夜干しの焼き魚を食べる余裕がなくなってしまったことです。

第56回日本アレルギー学会秋季学術大会

田 中 紀 充

アレルギー学会は久しぶりの参加でしたが、参加者も臨床医師が多く、基礎実験の色彩が強い免疫学会とは異なる雰囲気学会であり、臨床に即した疑問からの演題で、実験目的がわかりやすく内容を理解しやすいという印象であった。会場が広く移動に難渋した。

大堀先生が「アレルギー性鼻炎患者の下鼻甲介粘膜上皮における VEGF と TGF- β の発現について」、私が「アレルギー性鼻炎マウスモデルを用いた Phosphorylcholine 前投与のアレルギー反応抑制効果の検討」の演題で発表した。発表については、会場が小さく、物足りないままに済んでしまった。

実際の臨床での病態を踏まえて、実験をデザインして研究することの大切さ、面白さを感じる学会であった。

第36回日本免疫学会総会に参加して

福 岩 達 哉

2006年12月、大阪で開催された日本免疫学会に参加してきました。この学会は基礎系研究者はもちろんのこと、免疫学にかかわる臨床医も数多く参加されており非常に大規模な学会です。私は粘膜免疫、特に樹状細胞に関する研究テーマで発表してきました。この研究は米国アラバマ大学バーミングハム校 (UAB) 免疫ワクチンセンターに留学したときから継続しているテーマであり、その時にご指導いただいた UAB 教授の藤橋浩太郎先生も来日されました。免疫学会の中でも粘膜免疫に関する演題は増加傾向にあり年々関心も高まってきているようです。最先端の発表と活発な討論を拝聴し大変勉強になりましたが、特に UAB の前任教授で現在東京大学教授である清野宏先生の特別講演では、これまでの流れとこの先の展望がわかりやすく解説されており、このような有益な学会に参加できてとてもよかったですと思います。今後さらに現在の研究内容を高めていき、来年も本学会で報告できるような成果をあげたいと考えました。

第17回日本頭頸部外科学会

西元謙吾

平成19年2月1日、2日にかけて島根県の島根県民センターで第17回日本頭頸部外科学会が開催されました。今回は David Shuller 先生や Wan-sang Lee 先生が特別講演で来日されるなど、島根大学の川内先生の並々ならぬ情熱がうかがえました。我々鹿児島大学からは私西元が臨床セミナーとして「扁桃周囲膿瘍の重症例への対応」というタイトルで発表させていただいた他、大堀先生が「顔面多発骨折に対する治療経験」という一般演題で発表させていただきました。臨床セミナーでは深頸部膿瘍に対する様々な対応方法を若手の医師で検討するもので、新進気鋭の先生たちと色々なディスカッションをさせていただき貴重な体験をさせていただきました。大堀先生の発表は前頭骨を含めた骨折で治療法の工夫などを検討しました。

2月の島根は寒い事は覚悟していましたが、最悪な寒波にみまわれて大雪でした。例年島根は積雪で悩まされる事が多いそうですが、今年は暖冬の影響で雪が前日まではありませんでした。が、学会の日に限って今年一番かつ唯一の大雪でほとんど外には出られませんでした。それどころか、大堀先生と大島から参加していた永野先生は飛行機を見切って電車で帰る事になり疲労困ぱいだったそうです。冬場の豪雪地方での学会は侮れません。

第38回睡眠呼吸障害研究会

田中紀充

今回も前日の平成19年2月16日に耳鼻咽喉科部会が開催され、2月17日に全体の研究会が開催された。

耳鼻科部会においては、精神科からの側面で睡眠障害について興味深い講演を聴くことができた。睡眠呼吸障害において、患者様が同じ言葉で症状を訴えてきても、最初の窓口となる診療科において対応が異なっている実情が改めて浮き彫りとなった。ある程度は致し方ないところではあるが、医療者側も横断的な対応が円滑に進められる様に体制を整えることが必要であると痛感した。

土曜日の研究会では、本研究会の発足経緯、遍歴が紹介され、マスコミを含めて社会的関心の高まりから、当初の睡眠呼吸障害に対する啓蒙活動という役割は薄れ、より専門的、学術的、かつ、それを基盤とした診断治療の標準化に対する取り組み、責任が大

きくなっていると研究会の性格も変化してきていることが強調された。コメディカルスタッフの参加も多く、砂防会館の会議場が満員となり、後方に椅子を持ち出して公聴する状態であった。

私は、4回目の参加であったが、今回初めて演題を発表した。「小児 OSAS 症例に対する手術治療と術後評価」について、当科における過去の症例の検討から今後の診療につながるように考察した。成人睡眠時無呼吸とは小児は病態が異なり、手術治療（両側口蓋扁桃摘出術＋アデノイド切除術）の効果が高いため、漫然と手術治療が施行され、術前の検討、術後の評価は十分にされていないのが現状である。他施設においても同様の状態に問題意識を持つ先生がおり、質疑がいろいろ寄せられた。当科の睡眠時無呼吸に対する治療の現状は十分ではないと考えられ、今後、症例を重ね患者様の問題を解決できるように積極的に問題意識、意見、主張を持って治療に望むこと、また、民間の睡眠センターでは出来ない大学病院という性格を活かした臨床研究にも取り組む必要があると感じた。

第19回気道病態シンポジウム

田 中 紀 充

平成19年2月24日、例年同様、飯田橋のエドモントホテルにて開催された。大山名誉教授も毎年参加され、他大学の先生の演題に質問されていた。

今回は教室から2題演題発表し、いといろと有意義なコメントを参加の先生から頂いた。大堀先生が「アレルギー性鼻炎患者における下鼻甲介粘膜上皮からの VEGF, TGF- の発現とその意義」について発表し、新しいデータを提示して、本年の鼻科学会のシンポジウムにつながる活発なディスカッションが展開された。私は、「Phosphorylcholine 経鼻投与による鼻腔内細菌クリアランスの変化」について発表した。全体の内容としてはここ数年発表している内容であり、参加の先生も以前に聞いたことがあることもあったせいか、討論の10分が長く感じられた。私の不十分な応答について、島根大学の川内教授から補って頂きなんとか乗り切れた。今回でこの研究会でも3回目の発表であったが、10分発表、10分討論は、ストレスがかかる。また、少人数でいつもより丁寧に発表を聞いていただけのも喜ばしいことではあるが……。毎回のことだが、しっかり勉強しなければと思われ知らされる研究会であった。

第19回日本喉頭科学会総会・学術講演会

牧瀬 高穂

平成19年3月8, 9日の2日間, 神戸国際会議場で開催された第19回日本喉頭科学会総会・学術講演会に黒野教授, 福岩先生, 私の3名で参加させていただきました。福岩先生は「喉頭肉芽腫手術における XPS ドリルの応用とその有効性の評価」という演題で一般口演をされ, 私は「喉頭に発生した Basaloid Squamous Cell Carcinoma の一例」という演題でポスター発表を行ないました。出発前に参加人数はあまり多くないのではと聞いていたのですが, アクセスのよい神戸という関西都市圏で行なわれたせい, たくさんの先生方が参加されており, 活発な討論が行なわれておりました。私のポスター発表も多くの先生方が聴きにきてくださり, 緊張はしましたが大変有難かったです。また, 本学会は動画を多用した発表が多く, まだまだ臨床経験の浅い自分にとっては教科書でしかみた事がない疾患の実際の喉頭内視鏡所見などをみる事ができ, 大変勉強になりました。

夜は神戸の街で中華料理を堪能したり, 神戸の美しい夜景を見ながらお酒を堪能したりとこれまた大変充実した学会でした。

第1回 Airway Mucosal Immunology Study-Group (AMIS) Meeting

田中 紀充

真夏の東京にて, 熱い研究会が発足してしまった。

平成18年7月8日土曜日の18時, キックオフされた。福山先生 (Chronological requirement of cytokines and chemokines for NALT-genesis) が最初の演者であった。ディスカッションがエンドレスで続き, もしやサンライズルームでオールナイトかと危惧される中で進行されていった。第1群3題が終わったところで21時前, 食事に手をつけずに下げられてしまうのではないかと思ったが, 最初の休憩がバイキング形式の夕食でやっと一息つけた。会場のテラスに出て, 夜風に当たってあぶら汗をぬぐって, ベイブリッジを背景に医科研 NALT チームで記念撮影をしたが, 次の発表を前に私の顔はこわばっていた。

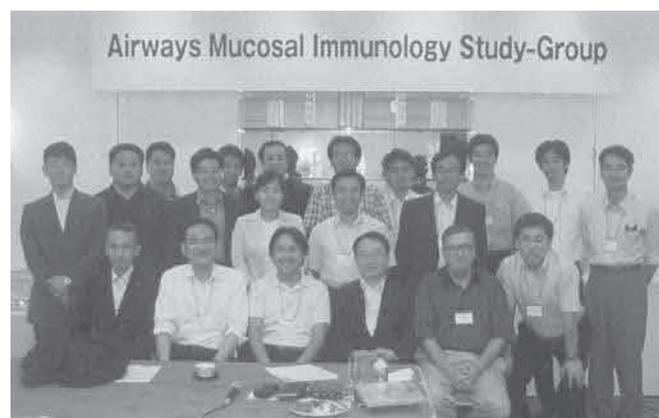
鹿児島からは黒野教授がこの会の世話人の一人として尽力され, 一日目の座長を務めた。福岩先生 (A Combination of Flt3 Ligand cDNA and CpG ODN as nasal adjuvants elicit memory NALT dendritic cells for prolonged mucosal immunity), 大堀先生

(Nasal Fibroblasts Produce chemokines and Adhesion Molecules for Eosinophils in Patients with Chronic Rhinosinosis), 私 (Mucosal immunity by nasal B1 cells that migration is independent of CXCR5/CXCL13 interaction) が発表した。和やかな空気ではあるが、Jerry R. McGhee 先生にいかにな納得してもらうか、みんな苦勞していた。論文の審査よりも厳しい指摘で、この会で OK なら J.Immunol は大丈夫ですとのコメントが出た。

夜は何時に終わったか忘れてしまったが、興奮冷めやらず、外にみんなで出て、ビールとつまみを買い込んでホテルの部屋で盛り上がった。韓国の金先生がいたので、ここでも英語の会話が続いた。研究会よりもお酒が入ると英語であっても口数が増えるのが不思議である。

今までに経験したことのない研究会であったが、その日にとどまらず、翌日、医科研にて McGhee 先生と NALT チームの Meeting, 清野研の Meeting, 3日間連続の discussion におなかいっぱいになった。

さあ、今後、AMIS がどのような展開になるのか。楽しみでもあり、不安でもある。ともあれ、すばらしい思い出となった。



AMIS
Kickoff meeting
 at Hotel Nikko in Daiba
 Sunrise-room
 8-9 July 2006

Team NALT in お台場



Dr. Fukuyama, help me.



Joint meeting of Otorhinolaryngology-Head and Neck Surgery

吉 福 孝 介

Joint meeting of Otorhinolaryngology-Head and Neck Surgery は平成18年4月6日～8日まで韓国の釜山にて開催されました。当教室からは、黒野教授と自分の2人で参加させて頂きました。

福岡まで新幹線で行き、福岡から高速船（ビートル）にのり、そこからタクシーにてホテルに到着しました。到着後には昼の屋台で、ちぢみとなんか辛い食べ物を食べました。

学会はパラダイスホテルで行われました。リゾートホテルでありましたが、自分は初日、2日目は学会場からバスで50分のホテルにとまったのでバスで通いました。

Welcomeパーティーでは、かなりゴージャスでありました。そこで秋田大学の先生と知り合い意気投合し韓国の温泉に行きました。自分の発表は Nasal fibroblasts produce chemokines and adhesion molecules for eosinophils in patients with chronic sinusitis でありました。韓国の先生が質問されましたが、（お酒を飲まれていたようでアルコールの臭いがしておりました）よく意味が分からず返答出来ませんでした。黒野教授が流暢に返答してくださりました。（教授の周囲のヒトはうなずいておりました。）紙上ではありますが、どうも有難うございました。

ERS and ISIAN 2006 (Tampere, Finland)

大堀 純一郎

本学会は2006年6月11日から15日まで、フィンランドのタンペレで開催された。鹿児島大学に留学経験のある Markus Rautiainon 先生が本学会の会長であった。当科からは、黒野教授、松根助教授と私の3人で参加させていただいた。

フィンランドといえば森と湖の国である。学会開催中のフィンランドは、ちょうど白夜の時期にあたり、日中の時間が約19時間もある。夜12時になっても日本での夕方ぐらいの明るさがあり、とても早く寝ようという気にはなれない。学会主催のレククルーズに参加したが、時間は19:30から22:30までで、帰ってきたときにもまだ日が沈んでいなかった。(photo 1)

学会は、ERS と ISIAN が同時に開催されている状態であったが、ヨーロッパでも副鼻腔炎とくに鼻茸については注目されているようであった。日本の鼻科学と違うと印象を受けたところは rhinoplasty が非常に盛んで、非常に活発な討論がなされていた。当科から参加した黒野教授 (photo 2)、松根准教授 (photo 3) もシンポジストとして活発な討論を行っていた。

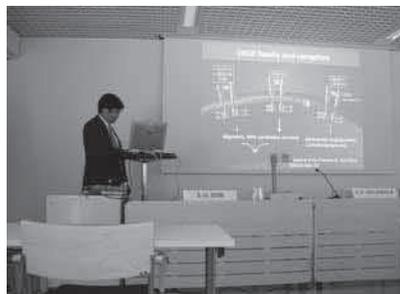
学会の終わりに、ガラディナーがおこなわれ、そこではフィンランドの名物であるトナカイの肉 (photo 4) がメインディッシュであった。多少癖があるものの私はおいしくいただいた。



(photo 1)



(photo 2)



(photo 3)



(photo 4)

2006 Joint Meeting of Eight Departments of Otolaryngology

林 多 聞

2006年11月25日と26日の2日間にわたって行われた Joint Meeting of Eight Departments of Otolaryngology には演者として相良先生と私が、座長として松根先生が参加しました。主催は National Taiwan University でした。同学会には過去2回参加していますが、いずれも国内での開催でありましたし、またこういう機会でもないを訪れることもないであろう場所でもあり、貴重な体験ができるものと期待して渡航しました。私は、Clinical strategy for unknown-origin carcinomas using PET と PET に関する報告を、相良先生は Keratin-specific antibody forming cells in peripheral blood might predict the prognosis of patients with palmoplantar pustulosis と当科で以前より研究している掌蹠膿胞症についての発表でした。学会は活発な議論が交わされ、とくに韓国の先生方は非常に流暢な英語を使うのでずいぶんと気圧されてしまいましたが、こ一番での相良先生の度胸はいつもながら大したものでした。台湾は親日的で、台湾大学の先生方も非常に親切に対応して頂き、不自由を感じることもありませんでした。観光で世界四大博物館のひとつである故宫博物院を見学する機会を得、所蔵の工芸品の緻密さには圧倒されるものがありました。同じ民族でありながら中華人民共和国とは異なる形で発展した都市や文化と触れる経験は、貴重であり感慨深いものでありました。

The 11th Asian Research Symposium in Rhinology

牧 瀬 高 穂

平成18年11月30日から12月2日まで、大韓民国のソウルで開催された The 11th Asian Research Symposium in Rhinology (ARSR) に黒野教授、福岩先生、田中先生、私の4人で参加させていただきました。ロッテホテルワールドが会場でアジア各国から多数の先生方が集まっており、盛んな討論が行なわれておりました。黒野教授は「Clinical aspects of eosinophilic sinusitis」の演題で、福岩先生は「A combination of fit3 ligand CDNA and CPG ODN as nasal adjuvants elicit long lasting immunity mediated by both TH1- and TH2-type cytokines and nalt plasmacytoid dendritic cells」の演題で、田中先生は「Intranasal immunization with phosphorylcholine induced protective immune responses against; *S. pneumoniae* and nontypeable *H. influenzae*」の演題で、私は「Increased expression of eotaxin in fibroblasts of eosinophilic nasal polyps」の演

題でそれぞれ口演を行ないました。個人的には耳鼻咽喉科入局後初めての学会発表がいきなり海外での英語口演だったので、大変緊張しました。また、いくつかの質問を頂いたのですが、質問の内容はなんとなく分ってもその答えをとっさに英語で答えることができず、教授の助け舟でなんとか乗り切ることができました。英語力の重要性を身をもって感じることができ、大変勉強になった学会でした。

ソウル行きの飛行機ではオーバーブッキングのために50分間のビジネスクラスフライトを初体験することができ、あのカーテンの奥で何が行なわれているのかの謎がひとつ解けました。また、ソウル滞在中は韓国料理を食べに行くこともでき堪能することができました。

3. 関連病院便り

国立病院機構 鹿児島医療センター

谷 本 洋一郎

鹿児島医療センターに赴任してから、5ヶ月過ぎました。九州循環器病センターから鹿児島医療センターと病院名が変わり耳鼻咽喉科も再開されてから1年近く過ぎ、松崎先生の御尽力で当院における耳鼻咽喉科の存在も大きなものになってきております。頭頸部癌の診療を中心に耳鼻咽喉科疾患全般の入院手術治療、および末期癌の患者さんの緩和ケアまで多岐にわたり、毎日学ばせていただくことも多く充実した日々を送らせていただいております。また手術もほぼ毎日あり、開業の先生方から御紹介いただいた症例を一例一例大切に勉強させていただきたいと思っています。4月からは病棟を現在の西4階から西3階に移ることになり新しい病棟で新たなスタートになります。忙しい毎日ですが、松崎先生の下で頑張っていきたいと思います。今後ともよろしく願いいたします。

県立大島病院便り

永 野 広 海

2006年4月から県立大島病院耳鼻咽喉科にて勤務しております永野です。簡単ではありますが、県立大島病院耳鼻咽喉科の概要につきまして説明させていただきます。当科は大島地区（喜界島、大島、徳之島、沖永良部島、与論島）の中で唯一の入院手術をしている施設です。本島はもちろん、他の島からたくさんのお客様がみえます。

昨年11月には出口部長から吉福部長に変わりました。吉福部長は鼻領域が御専門であるため、鼻の手術（特に鼻内内視鏡手術）が増加しております。また扁桃、耳下腺、甲状腺、その他を含めまして、2006年度は200件を超しております。

これからも微力ながら地域医療のため頑張りますので、宜しく願いします。同門の先輩方、地方部会の先生方には今後ともいろいろと御迷惑をかけることがあると存じますが、御指導御鞭撻の程宜しく願い致します。

鹿屋医療センター便り

高木 実

皆さんお元気ですか？私高木が鹿屋医療センターに赴任して、早2年になろうとしております。鹿屋医療センターは大隅半島で唯一入院・手術出来る施設であるため、あらゆる救急疾患や、精査目的で非常に頭を悩ませる症例や、非常に稀な症例を経験できた事の大切さや有難さを日々感じています。それも大隅地区の耳鼻咽喉科医師や他科の開業されている大勢の医師達や鹿屋医療センター外来・病棟スタッフのお陰だと思いつながら、日々勤務しています。また月1回の勉強会では非常に頭を悩ませた症例などを提示し、経験豊富な先生達から意見を頂くことで解決の糸口を見出す事ができ、大隅地区の耳鼻咽喉科医師はすばらしいと感嘆させられます。

昨年2月には、病院体制の変化に伴い耳鼻咽喉科病棟も移動しました。そのため、スタッフの変化など様々な事が起こり、大変な1年だったような気がします。しかし病院内の変化は疾患には関係なく、平瀬部長の『病気は待ってくれない』という言葉をいつも肝に銘じながら、頑張っています。今後とも私高木、部長平瀬をよろしくお願ひします。



鹿児島市立病院便り

下 麥 哲 也

諸事情により、2回目の鹿児島市立病院勤務をさせていただくことになりました。診療スタッフは、花牟礼部長、笠野科長、小松原医師、私（下麥）の4名で、非常勤として、鹿島医師も週1回、診察して下さいます。今回はスタッフの紹介を中心に、報告させていただきます。

花牟礼部長は、ダンディ&クールという言葉がぴったりで、看護師の中には密かに「ハナムレーゼ」と呼ぶものもいるとか、いないとか。頭頸部腫瘍を中心に、耳鼻咽喉科治療全般をこなす大黒柱です。

笠野科長は、ミステリアスな耳のスペシャリスト。毎朝、自宅から歩いて通勤されていますが、汗だくになられても、コートとサングラスをはずすことはありません。男の美学を感じます。手術室における密かな愛称は、「ふじやっこ」です。

小松原医師は、関西弁が素敵な、宮崎医大出身の女医さんです。外来も手術もスピーディーで、お酒もストロング。今のところ、宴会では下麥は連敗中であります。

そして、最後に鹿島医師ですが、週1回ではありますが、小児難聴外来を、バリバリとエネルギーにこなされています。まさに生涯現役という言葉がぴったりです。鹿島医師の元気な声をきいていると、みんなやる気がわいてきます。

いかがだったでしょうか？このような素晴らしいスタッフのなか、私も自分の目標にむけて、一日一日を精一杯、頑張っていきたいと思います。

藤元早鈴病院便り

森 園 健 介

皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

平成16年7月から藤元早鈴病院で勤務させていただいている森園です。こちらの病院に勤務させていただいて早いものでまもなく3年になろうとしております。

さて藤元早鈴病院といえば、現在唯一の鹿児島県外への派遣先であるわけですが、近頃の宮崎県は何かと全国的に注目を集めるようになっております。最近では新しく就任された某県知事が有名ですね。その姿をテレビで見ない日はないというぐらいの大人気で、今や宮崎を代表するキャラクターとなっております。実際、今の宮崎産のおみやげ物には必ずといっていいほど県知事の似顔絵が描かれている状態です。

実際の選挙活動を見る機会はあまり無く、ぼろぼろの選挙対策事務所の外観を覗いたり、選挙カーと行き違ったくらいでしたが、宮崎県のことを真剣に考える姿勢が窺えたように思います。彼は地方の医師不足を陳情したりもしていますし、「宮崎」ばかりでなく「地方」をどげんかせんないかん、という方向でがんばっていただきたいと勝手な期待をしております。

それから去年の冬場は鳥インフルエンザが宮崎県で猛威を振りました。最初に宮崎県で集団発生があった清武町は都城市のすぐそばにあり、鶏の処理に当たった人が発熱したとのことで、当院に搬送・入院になったこともありました。幸い陰性であったため大事には至りませんでした。全国一の鶏の産地である宮崎県にとっては今後も頭の痛い問題になっていきそうです。今年には患者さんが非常に少なかったですが、インフルエンザと接する機会も多く、感染病棟のあるフロアに病棟がある耳鼻科にとっても同様に悩ましい状況が続きます。

ここまで宮崎県関連のお話でお茶を濁したところで当院の近況ですが、一般内科、血液内科、糖尿病内科の先生方が新たに着任され、内科の充実が図られました。特に手術前後の管理の点で糖尿病の専門家がある安心感は非常に大きなものがあります。

また研修医制度の変更に伴って、当院でも研修医の受け入れが行われるようになりました。まだ少人数しか受け入れてきていないようですが、よりよい研修機関として試行錯誤中かと思えます。耳鼻咽喉科は直接研修にあたることはありませんが、暇を見つけてはちょっとした研修と耳鼻科への勧誘を地道に行っております。

相変わらず一人で色々な症例に悩みながら毎日の診療を行っておりますが、対処に困ることも多く、黒野教授をはじめとする大学の先生方にはいつも大変ご迷惑をおかけしております。また近隣の開業医の先生方もいつも患者様の御紹介をいただき、ありがとうございます。今後も各所に御迷惑をおかけすることも多々あるかと思えますが、引き続き御指導をどうか宜しくお願い致します。

済生会川内病院便り

上 村 隆 雄

川内に帰郷し早4年目を迎え、心身ともに川内がらっば化（こちらでは、センデガラッパという）が進化し、本物の川内人となりつつある今日この頃である。昨秋、毎年申請し続けた（ガムテープなどの修理で持たせたがもはや限界？であった）念願の外来ユニット、椅子が入り、外来が広く明るく生まれ変わった。以前は2人診療用の対面式のユニットであったが、プライバシー等今後のことを考え、1人用とした。ユニットはかなりコ

コンパクトになり、1人でも処置器具が十分手の届くサイズである。色やデザインも丸みのあるやさしい感じのものとなった。椅子はジャッキアップで簡単に移動できるものとし、以前の固定式のものより、外来手術や、車椅子、ストレッチャーでの処置に対応しやすくなった。当直体制も若干改善され、救急当番日に内科系は、午後7-10時は開業医が1次救急対応として、病院内の救急外来に待機している。外科系は、休日昼間の救急患者が多く、特に整形外科医の呼び出しが頻回なため、1月より休日昼間の当直医を1人から2人と増員し対応している。耳鼻科は外科系当直のため、当直が月1回増となった。外科系も開業医の応援があればと願っているところである。地域の開業医が高齢化し、救急輪番から撤退され、ここ済生会と川内市民病院が10-11回ずつ地域の夜間・休日救急を担当している。この地域では、この2つの基幹病院の勤務医の負担はますます増えてきている。

平成16年の研修医制度改正後、全国の地方の医療機関には様々の問題が生じてきており、今まさにその激流の真ただ中にある。産婦人科医や小児科医の不足、救急医療、高齢者問題、緩和ケアを含めたがん医療、など、日々の診療で痛感させられる。最近、Dr.コトーこと、甕島の手打診療所の瀬戸上先生の離島診療所日記を読ませていただいたが、今の地方医療は、医者不足であった昔に逆戻りした感がある。研修医制度の初期研修を終了した医師が、すでに現場に戻ってきているはずであるが、若手医師は大都会の病院に集まり、地方の医療崩壊が現在進行中である。団塊世代が大量退職し、高齢化社会も予想以上に進んでおり、今後高齢者患者の増加は急激に進み、地方で医師不足や救急を担う基幹病院での勤務医の激務はさらに深刻になってくることは容易に想像がつく。救急やプライマリーケアができる家庭医が多く必要とされるが、欧米のような医学教育や医学制度がなく、現在の研修医制度も以前のものとは大差は実感できず、地方の医療の暗黒時代がしばらく続きそうである。地方の基幹病院の勤務医は、救急外来や夜間当直（実際は夜間勤務とほぼ同じ）をさせられ、当直明けも定期で働くという、日中8時間、当直16時間、さらに翌日8時間の32時間連続勤務が一般化している。そうしなければ今の制度では病院は機能しないのである。こういう流れに嫌気をさした勤務医が大量退職し、救急外来や、診療科の閉鎖を余儀なく行っている基幹病院のニュースが、各地でポツポツと聞かれるようになってきている。ここ済生会病院も地方の基幹病院であり、救急当番や当直が輪番でくるため、それぞれ月2-3回、当直（夜間、休日勤務と言ってもよいボリューム）がやってくる。研修医時代の当直はいろんなことを体験でき楽しかったのであるが、さすがにこの年になると、自分の専門外のことをやることは、かなりのストレスである。いまさら、Dr.コトーになれるはずもなく、ましてや当直の翌日の診療となると体力的にきつく、居眠り運転状態である。各部長クラスは大半が40をとうに越え、若い？とはいえない年齢であるが、なんとかやっている状態である。み

な今後も年をとり、事態は深刻である。

都会と地方との経済格差もここ数年広がってきている。医療費も以前の、高齢者負担なし、本人1割負担の時代は夢物語である。最近、50-60代の男性の末期悪性腫瘍の方がたて続けに受診された。自営業で家族もあり、一家の大黒柱である。家には自分の親の介護等、大変である。闘病生活となると仕事ができなくなり、まず医療費、経済的な問題が生じてくる。がん治療は当然であるが、様々な問題がでてくる。病院の医療相談、福祉係を交えて対応しているが、弱者に厳しい時代になった。3人に1人が、がんで亡くなる時代である。医療とは何かを日々しみじみと考えさせられている。

日本の医療は「医療費の削減」と「安全で高度な医療」という正反対の方向に向かわされている。医療費が削減されるほど余裕がなくなり、多忙のあまり十分に目が届かず、安全な医療は困難になる。まずは医療にかかる費用の大幅な増額しかなく、それによって初めてマンパワーに余裕ができ、医療の安全性が向上するはずであるが、いかがであろうか。

鹿児島生協病院たより 第二報

積山幸祐

2005年4月1日に生協病院に赴任して早くも3年目に突入しました。外来を減らして手術や入院を充実させていきたいのですが、相変わらず外来患者は多く（特に予約外や手のかかる患者が多い）、救急外来経由の眩暈患者（一日に7人見たこともありました）や鼻出血も多くなかなか思うようにはいきません。めげることなく目標をもってがんばっていきたいと思います。

さて、最近の生協病院の出来事は 病院のリニューアルです。リニューアルのため2006年6月から2007年9月（予定）まで工事中です。総病床数は変わらず「差額料金」なしの個室は25床から35床になり、狭い6人部屋がなくなり ゆったりの4人部屋や2人部屋、さらに手術室を一部屋増やし、準ICU（仮名）を造るというものです。医局も駐車場に立てられたプレハブに引っ越しました。外来・入院の診療を行いながらの工事であり、かなりの騒音で聴力検査のたびに工事をとめてもらわなければならず、説明の声も大きくなり、ストレスも増大しています。

耳鼻科の手術枠は、週2単位のみ（火 木の午前中のみ）ですが目いっぱい活用してもっと手術ができる病院にしていきたいと思っています。最後に05年4月から06年3月までの手術症例を示します。扁桃の中には自分の娘 3歳も含まれています。貴重な経験でした。

扁桃（アデノイド切除を含む）	45例
UPPP	3例
アデノイド切除術	6例
ESS	23例
devi+subcon	5例
鼻茸切除術	2例
上顎骨骨折整復術	1例
眼窩壁骨折整復術	3例
鼻前提嚢胞摘出術	1例
鼓膜形成術	5例
鼓室形成術	1例
鼓膜チューブ挿入術（全麻）	1例
先天性耳瘻孔	3例
下口唇粘液嚢胞	3例
舌良性腫瘍摘出術	1例
咽頭異物摘出術	1例
LMS	7例
喉頭蓋嚢胞摘出術	1例
顎下腺摘出術	1例
甲状腺切除	3例
甲状腺垂全摘	1例
耳下腺切除術	1例
がま腫摘出術	3例
正中頸嚢胞摘出術	1例
計	122例

天辰病院便り

原 田 みずえ

昨年の11月に当院に赴任し、早5ヶ月が過ぎました。だいぶ、当院にも慣れてまいりましたので、当院の紹介をしたいと思います。

当院はS55年に外科の天辰健二院長が開設された『天辰外科病院』でありましたが、S59年に耳鼻咽喉科、胃腸科が、H6年に眼科が増科され、H9年に『天辰病院』へ改

称、H12年に耳鼻咽喉科の外来を受け持つ『あまたつクリニック』が天辰病院の2件隣に開設され、今現在に至っています。よって、耳鼻咽喉科の病棟は天辰病院内にあり、外来業務はあまたつクリニックで行っているため、白衣にマスク姿で外を歩いて、病院とクリニックを行ったり来たりしているのを、巷の人々に見られるため、赴任当初は恥ずかしかったのですが、最近は気にならなくなりました。私はもう、これに慣れてしまったのですが、入院中の患者様を外来診療の合間に診察することがあるため、患者様に外を歩いてクリニックに来ていただくのですが、患者様はすっぴん&パジャマ姿で外を歩かされ、さぞかし恥ずかしいだらうと思いますが、今のところ苦情は聞かれないようで、申し訳ないなあと思いつつ、ほっとしています。

そして、この病院は鹿児島大学病院に一番近い関連病院でもありますので、大学病院より、よく患者様の紹介や入院の依頼をうけます。病棟は全科で40床ですが、その内、常時5人前後の耳鼻科の患者様がいらっしゃいます。入院目的は様々で、ターミナルケアや化学療法、突発性難聴や扁桃炎などの急性疾患が多くなっています。外来は、以前は100人、150人と非常に沢山の患者様を診ていたそうですが、今は1日平均50人位の患者様を診ています。その内、約半分が小児で、アレルギー性鼻炎や副鼻腔炎、滲出性中耳炎の小児を診る機会がかなり増え、暴れる子供たちと毎日格闘していますが、お絵かきや工作を持ってきてくれるので、心が和みます。また、2月はインフルエンザに罹患した患者様を診ることが多かったためか、自分自身もインフルエンザに罹患し、大学病院より急遽代診の先生をお願いする羽目になってしまい、大変ご迷惑をおかけしました。また、喉頭浮腫による気道狭窄で呼吸困難を来し、意識朦朧状態になった患者様を大学病院へ救急搬送し、緊急気管切開していただいたおかげで、その患者様の一命を取り止めることができたということもありました。大学病院のありがたさ、一人で診療する大変さ、前任の先生方の偉大さをしみじみと感じた次第でした。

あまたつクリニックは、毎週水曜日、日曜日が休診、土曜日は午前中のみ診療になっていますので、毎週水曜日は、大学病院でのカンファレンスへ出席したり、外来のお手伝いをさせていただいたりしています。大学病院と連携をとりつつ、今後もがんばっていこうと思いますので宜しくお願いいたします。

XI. 関連病院

(平成19年4月現在)

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
国立病院機構 鹿児島医療センター	892-0853	鹿児島市城山町8-1 TEL:099-223-1151 FAX:099-226-9246	月・水・金 (8:30~11:00)	月・火・水 木・金
国立療養所星塚敬愛園	893-0041	鹿屋市星塚町4204 TEL:0994-49-2500 FAX:0994-49-2542	火・木 (8:30~17:00)	
県立大島病院	894-0015	名瀬市真名津町18-1 TEL:0997-52-3611 FAX:0997-53-9017	月~金 (8:30~10:00)	火・木・金
県民健康プラザ 鹿屋医療センター	893-0013	鹿屋市札元1-8-8 TEL:0994-42-5101 FAX:0994-44-3944	月・火・水・金 (8:30~10:30)	月の午後 木
鹿児島市立病院	892-8580	鹿児島市加治屋町20-17 TEL:099-224-2101 FAX:099-223-3190	新患 月・水・金 再診 火・木 (8:30~11:00)	月・水・金
済生会川内病院	895-0074	川内市原田町 2-46 TEL:0996-23-5221 FAX:0996-23-9797	月~土 (8:00~11:00) 月・金のみ(再診) (14:00~16:30) 水の午後 第1・第3 特殊検査 第2・第4 補聴器外来 (14:00~16:30)	火・木の午後

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
鹿児島生協病院	891-0141	鹿児島市谷山中央 5丁目20-20 TEL:099-267-1455 FAX:099-260-4783	月・火・木・金 (8:30~17:30) 水・土 (8:30~12:30) (新患は30分前まで)	火・水・木 の午前
今村病院分院	890-0064	鹿児島市鴨池新町11-23 TEL:099-251-2221 FAX:099-250-6181	火・土 (8:30~11:30)	
藤元早鈴病院	885-0055	都城市早鈴町17-1 TEL:0986-25-1212 FAX:0986-25-8941	月・水・木・金 (9:00~17:00) 火 (9:00~11:00)	火の午後
市比野記念病院	895-1203	薩摩郡樋脇町市比野3079 TEL:0996-38-1200 FAX:0996-38-0715	火・木 (14:00~18:00) 土 (9:00~18:00)	
あまたつクリニック	891-0175	鹿児島市桜ヶ丘4-1-6 TEL:099-264-5553 FAX:099-264-1771	月・木・金 (9:00~18:00) 火 (14:00~18:00) 土 (9:00~13:00)	火の午前

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
垂水中央病院	891-2124	垂水市錦江町 1-140 TEL:0994-32-5211 FAX:0994-32-5722	火・木 (13:30~16:00) 土 (8:30~11:30)	
加治木温泉病院	899-5241	始良郡加治木町木田字 松原添4714 TEL:0995-62-0001 FAX:0995-62-3778	火・木 (8:30~11:30)	
田上病院	891-3198	西之表市西之表7463 TEL:09972-2-0960 FAX:09972-2-1313	火 (9:00~17:30) 水 夏(14:00~17:00) 冬(14:00~16:20)	
阿久根市民病院	899-1611	阿久根市赤瀬川4513 TEL:0996-73-1331 FAX:0996-73-3708	火・金 (8:30~15:30)	
指宿鮫島病院	891-0406	指宿市湯の浜1-11-29 TEL:0993-22-3079 FAX:0993-22-3019	月・火・木・金 (8:30~15:00) 土(8:30~12:00)	
栗生診療所	891-4409	熊毛郡屋久町栗生1743 TEL:09974-8-2103 FAX:09974-8-2751	第1・第3 金(8:00~16:00) 土(8:00~10:00)	

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
豊永耳鼻咽喉科医院	868-0037	人吉市南泉田町120 TEL:0996-22-2031	第2・第4 土(9:30~15:00)	
鹿児島厚生連病院	890-0061	鹿児島市天保山町22-25 TEL:099-252-2228 FAX:099-252-2736	火・金 (8:30~17:00)	
公立種子島病院	891-3701	熊毛郡南種子町 中之上1700-22 TEL:0997-26-1230	各週木曜日 (8:30~16:00)	